[illegible][illegible]記 一

特別
へ12
5090
1

一条院寛弘ヨリ堀川院康和二ヶ百年ノ此間六代 村上 冷泉 円融 花山 一条
一条ヨリ 三条 後一条 後朱雀 後冷泉 後三条 白川 堀川 此ナド源氏ノ物語
寛弘ノ初ヒキサリ康和ノ末ニヒミルトアリ カミアニテミヘ
物語ヲ西ノ宮ガシ大斎院ハ後一条 後朱雀ノコロニテ有シ 今ワ思君ニアハテヤ
ヤミナマシ ハナアモリノ年ナカリセハ此ウタアリ 村上ノ十宮タリ

四条宮ノ女十子ニ合スハム
逢見テ人ノハ十年ニノ多ナラマイツカハ君シ又ハミハヘ中 上東門院
王ノ仙崩御ノ時ノ哥

一条院寛弘ヨリ堀川院康和ニテ百年ノ此間六代　村上　冷泉　円融　花山　一条
一条ヨリ三条　後一条　後朱雀　後冷泉　後三条　白川　堀川　此ト十源氏ノ物語
寛弘ノ初ヨリ康和ノ末ニヒミルトアリ　カミアミナシ
物語　雨夜ノ品定ヨ　大斎院ハ後一条　後朱雀ノコロニテ方今ノ合アリ思君ニアハラヤ
ヤヱキシハナアヒクノ年ナリセハ此ウタアリ村上ノ十宮タリ

円融院ノ御時ニ人ニ合スルニ
逢ヲ見テ人ハ十年ニノタナラテイツカハ君ヲ又ハミルヘキ　上東門院
王ノ崩御ノ時ノ哥

一条院寛弘ヨリ堀川院康和ニテ百年
一条ヨリ三条 後一条 後朱雀 後冷
寛弘ノ神ヒヲ引テ康和条ニ
物語西タテアリトモ大舟院ハ後一条
ヤ事ナシ、ハナアセリノ年ナカリセハ

四宮ノキサキニ合スル故
逢テミ人ヲハキサキニテノハタナラ

一花車金一つ言之
拵り候得ハ又御可有之

光源氏年次

桐壺巻 自誕生至十二歳 巻末有送年之意 海後日数二日

帚木 十六歳 三日 空蝉 一日 同 夕顔 三日 同至十月

若紫 三日 十七歳 自三月至冬 末摘花 二日 十七十八才春季

紅葉賀 十七十八才 冬誕 至七月 二日 三后未詞有疑月日之心

花宴 十九歳 一日

葵 廿二三才 三日 廿才中両巻之間在之

榊 廿二三四才 三日 至六月

花散里 廿四才 五月

須磨 廿五六才 三日

明石 廿六七 至秋 二日

水尾巻 廿七八 二日

蓬生 廿七八未詞有送年之意

へ12
5090
1

(2001-054)

関屋 廿八才九月 二日

絵合 卅歳三月 為廿九才歟 廿九才ノ年ヨリ至卅又冬之間但此冬ニ斎宮女御入内

松風 卅歳 三日

薄雲 卅 卅一至秋 二日

槿 卅二至冬 二日或一日

少女 卅三 至卅四才 三日

玉鬘 卅五 二日

初音 卅六正月 一日

胡蝶 同年自三月至夏 二日

常夏 同年六月

蛍 同年五月 二日或一日

篝火 同初秋 三日

野分 同秋 一日

行幸 同十二月ヨリ卅七 二月ニ了 二日

蘭 卅七八九月 一日

真木柱 卅七冬ヨリ至卅八 二日

梅枝 卅九春 一日或二日

藤裏葉 卅九自三月至十月 二日

若菜上 卅九ヨリ至四十一 五日或六日 三ノ宮ハ大字百廿七丁廿五六丁九十九

同下 四十一三月ヨリ至四十七 五日 百十七丁

柏木 四十八春ヨリ至秋 二日 四十二丁

横笛 四十九 薫二才 一日 三十二丁

鈴虫 五十 一日 十八丁或廿丁云

夕霧 五十 四十二丁 四日或三日

御法 五十一 自春至秋冬ニ 二十四丁 一日

幻 五十二年中 薫五才 廿五丁 一日 侍従 秋中ヲ

雲隠

匂宮 薫十四才ヨリ至十九 宰相中将 至廿歳春賭弓ノ事ニ 十七丁 一日

紅梅 薫廿中納言 十七丁 一日

竹河 薫四位侍従 末中納言 五十三丁 三日或四日 三帖合四日

橋姫 宇治 匂宮ニミエ ウハソクノ宮京ニテノ事ヨリ薫ハ十九才宰相ノ年ヨリ廿一才ニ至ルヒ匂宮兵部卿ノ乱ヨリ雑説ヲ処多シト別ニ注ス 先ヨリ二十六宰相中将ヨリトミヘ 四十五丁 二日

椎本 四十四丁二日
総角 百三丁四日或五日
早蕨 廿丁一日
宿木 百丁四日或五日
東屋 七十七丁三日
浮舟 七十七丁三日
蜻蛉 七十二丁三日
手習 八十三丁三日或四日
夢浮橋 廿一丁一日
宇治廿六日或七八日

私
栄花物語第五 浦々の別 長徳二年事也
伊周公 于時内大臣 左遷也
四年八廿二三はかりにて此ころとしのわりうたりとけ
いろかひまとしさそことしうの之程思ひやるを
なんとミえたまふ

同八 はつ花 寛弘五九十一 一条 御産 立后 紀伊守にて序
此巻之作者は紫式部なりとそいへる ところところ
ひとこときこえさせて 紫式部 上東門院へ参れ
ことに此のそれかのこはりのとはかりしはえてつかうまつりけり
有名な紫式部ハ従五位下為時女 為房朝臣母 常陸介為信女
女作源氏物語中に紫式部と号すと

同巻 寛弘七 尚侍妍子入東宮也
上東門院
中宮のまてせさせ給ひしおりそれをやくさうかとりものへつかはしけれ
そのはまりとまそ三つきのさとか

源氏物語聞書　或説并断簡加之

作者

紫式部　藤為時女作也或説見河海抄花鳥餘情等

作意

大斎院選子村上女十宮　所望上東門院一条院后宮御堂殿女之時式部即

作進之云々連々用意也

詣石山寺得趣向之由見河抄但説般若之説無實也（在縁起云々）

大意也君臣父子夫婦朋友之道以教人也関雎之德可見又模荘子寓言更有一字褒貶凡明盛衰必真會

寺定離之理而已

或説云一部之作意比天台四教五時云々

時代寛弘初造出之康和流布特五条三品京極黄門比

貴説云々　従寛弘迄文明十年四百八十余歳也

諸本不同　草書　中書　清書有差　手不可限　青表
帋河内守流両本也　俊成卿文子之本猶有異云々
可有料簡歟

題号　全篇以光源氏君事為詮　故号源氏

源氏姓　始于嵯峨御子信(諱)公　見河抄

源字　乎　澄觴小水為九河之源之義　祝而用之也　此物語
亦含其理　仍累世握翫不絶也　又水源有口決一説

准拠

桐壺帝准醍醐天皇　以下見河抄　貴聖代之故　延喜為
寂初也

光源氏雖准西宮左府高明公　西宮　源氏　而又用公東征菅

家在中将沈淪等并比之　不摸一様　用舎随宜也
仁明御子源光　右大臣　正二

光君密通女御等之事　准在羽林好色　粗相似乎　古来稱美

古人各不可説云々　順徳院御記等見花鳥　我國ノ至
宝ハ源氏ノ物語ニスギタルハナカリシ云々

定家卿　制読之　説別　誌之

桐壺

此巻始于桐壺更衣之故為巻名也　凡就巻名有四意　准天
台四諦法門之由見于花鳥
此巻中源氏君降誕生至十二歳迄　此巻ノ[illegible]
[illegible]十二歳[illegible]

是本ナル癸亥八十六歳也此癸亥ナル中前ナル年ヘヒ逢フ
年すゑの癸亥も此さくらに作り
一 清原の本ハ人此ゟ　此翁猶ナル辞甚深にしるしある者の
形状合ゟ先後此ヒあらハしそこにつきても本
とむきこそねんしきせ作り清年にて癸亥の縁乃詞とも
読んとり作先作ゟ年中ち作り信ゟ（名雖ヒ本ハ作ゟ
為時ニ宣は朝ゟ時安房も中何ゟ（おとりこそ
辞しもせぬやうのハつくみとほりより（へらる
伊勢集の初詞同之主要とゟ次又此辞より乃深き
仏作ゟ秘伝あり
安部文衣　洋汗海　本院宮職大臣清称とし兼以之
安部安信也正三位上位也文衣ハ安宮之名ゟ（一条摂関清注）

さて先より佳其町にて田作り行つる（固ハ文衣ト小基所ト為別ナリ一位文衣ハ安房ノ名ナリ）
小基所ハ為ノ名之同中ゟ文也（ナルヤ）此詞より其中下の性（代）
但東宮ノ安作ラモ清基所ト云ヒ
慶經志ゟ人作ゟ上らうハ翁えへしみちも志へきなり
時勝大ナル詞也らハ（三恥之
年しゟ下らう乃文衣さらハ　まして下やとさうしとき
詞んて下府うの性名くらる也
うき作松山ゟりしや　人乃此代并ハあ年てゟうしらす
作ゟの名ひ云へし
あはしく　作りしすとてもあへし　一位
作ハ不順く　作ゟとなさ以也或院察もあき是主の毎とゟと
まはゆきさ　善悪ニ毎とゟ辞之當時ニむかう年しわ作り
うゟしはくゟよの本たりしうそ

殷紂妲己を愛し周幽王褒姒を寵せしより世の乱れ
しも本あはひきんてより次の弁とやうきめのたゝし
ひきつそはやうこれ書紀のうらしまれふと是（と今）（書紀云是也）
たゝり八起ト驕ト成院けり記にかくかうつりきをや
はこそのくみへ　母なのくみへしけりそと白河院
てありやうらくしけりくりて世の人なと成ふれ
やすらんきこゆりよや
一乃君には　朱雀院と申せしのまゝに女御
をかすく　よせ縁をくしきへ何ゝ
をはうくの人まへてし給へき
こそうし　こらしきゆへすみの網とし世のふ　御製る
くうりよやもくほくこりしみと無常ゆゆ池けり

ほつるゝときりつくをはり　桐壺源氏良やうけるひと
殿上論より
うつりし　淀殿のきりあんへきらの極をあらし一尺母ふ
とうふけり一尺
あまたのきさきりん　出来をてきつくり曹司けらしとこら内へ一尺
又ちなる　そむくとよもえいし又宮のきらむもへやけり
あらしそうしてきりんてさせ居　退出のやうしときて次の
網ふんつまこ言申しんのるけり宮文統にまはり
ころつそとききやらむとて　山網とし意をに全清に里
てゐすのせんし　評議る

（輦車抄ニ云人後冷泉院…遅テ今出内裏ダニ…宮ノ院）
（手車　宮ノ例車トヤラニヨセタリシハセハクテ無可乗用シ擬シハ　令備頭ダニ乗シハ諸悵手輦令乗給手車ヲハソハラコソヨスレト　申サレタリテ八時ワハラヨヤタリシハ廣クテ令奉タニヒテナリ　不知子細ハ令備頭ダルハラルヤアリケリ　乗ラレトシタニハ見ヘ是ヵ）

りむト有依定ケル手車ナ輪ノチイサクテ
ソハノ廣クテ前ハセハキモノナリ
和秘抄ノ一篇作ニ マシミウチカケテ手ニテモ引車ナリ
くまりけるにや　文治の比しのびえて年を経りめ
まししふるの妹鳥羽りとこと
ひとく思ひ移へおしくまて　此陪も感けりとこゝろよく
よろ付みえし　此のうへしかりあろまつ〻思ひ給ひし出世
ミ入あはさ〻のへし　長はる哉例し
冬こしせつきみりとも　文治の置くれ俳諧し
つき存し出家とゆるし給ひこれにさうかく思合しりて之
と御たらし侍ふらひ給ひ御事きこえけれと　長谷にか〻も
和秘抄にあり
あまよろ行人もおかしうて
之事の〻とき〻うき此代よりはさすかしく長まり

よろしきことなるに　太政入道殿し出ありてひあかくを
事なきおれる代　又ひそかり給ひん吉事の詞んそか
なりとミら左中将海給侍りけりての所にて事なあ
三位のくら井　長門のくらかとよもやさきこゝや成ありへい
おいてきくミ可まくるかとけり和秘抄に三位り由也ミら
いまひときこミ位ことこそ〻ら安給みりけり
帯とし〻ハ世左とかけりし此つりなりけりとい
こさいてれ依頼しうり関白殿に出家けり
此世のありくし　またのしと思ひとりあまり
あてておとい　引音奉行
思ひしこ若葉はあのとまん代つりして
出家しき又ゆけ給の余婦とつるやれし

野分かと見て
よく涼むさ
　衾すゝむるあつまる人同し　一夜肌付年に　将棋一勘
　将の字の心するへし
秋風やそこらにみとゝろし将の心やうと
みとりふ氣にまちたようふ心よりや　みちよの情しき　虜
何にし用にやよりしよりつらに叶ゐ
ゆきゝの念婦　　去来記
やうの月くれ都とより侍り　　川音在河
　よらは歳月三ち志まりねよとけの事とゝ是今のおり新の
　為すりは見やうのつれ都とより侍りと云り
野分よりてにわ車さつり心りしく　　身を捨りく河
　雨の外にもおゆ咲きより人ちとをみり
あへ世くうりもさわり河
　川音在河
　ら素やと行く秋月さう人てくけりおり
きしつのたけ
かく夜をうし
ミやうの旁咲せるふ　　勅書の御同し　久記号
おりの具りん
　年すりくふゐのやうも　川音在河
よく旅すあつやかれく
　生夜様所のとく具之り　子後旦夕にてり主義の母同や
人の心はかけうみ事は行としと　人の事のゑすと種りくさせぬ
　入紅葉よりのろそへ耽折り車しまりまちとそのゑて
　野辺の流人つひ勝
蝶のよふくりくりしかすり　鳥の雁しゃ
まけの在のとりと　　立き鳥つりよ心人とて絵常なり

こゝにまかせて詠へく　是にへき也
春けり　此もしとも来し　一首
むかしのこゝろ湧りけりな菜と
[illegible]ありけりもけれしとこゝろ[illegible]
古拍子の絵　大嘗会　此式[illegible]清よまるゝ中々
柳とうへしきへ[illegible]の[illegible]にや　[illegible]
けしの古[illegible]の物語さうやうなき中やと
うかしむかしなきくきりの
ミとりかくしきと心むかしあけりなと
西成けりしてまさまのまゝにて一首に
霞大納言のゆかしとんあやすることを
大納言の心さしと文永のさまきにまくしよよりく
ミてけりなる也

おもかくとこそ　文永のこゝろ中よりそうなる也
まかなく　大河　参議蓮華入道なりしせうとも
大納言かならす赤染の柳　大嘗会
よろしとそありなり
赤染柳　青表紙にありて絹不能清之
ハあり[illegible]也　青紙のうへにハ[illegible]よこれ
きよりのなるも春にて
　　[illegible]青表紙の[illegible]ニハ
世にあれて[illegible]のさくと[illegible]まのなるも孫よ
りとあり河つひまなせしくきところへ心ハ[illegible]
紙ノ黄表紙柳　ミタト[illegible]ハうつりくこそあり[illegible]
文永の本をはニハ[illegible]ニモなミをなるへくこそと也
黄表紙柳　ミタトつもハ[illegible]そりのくさ也

月もなりね　紀有常也こゝに経平の中将ありくさめら
嵯峨のうしし　五天到月頭應白　文徳右數ゟ
けふも志らそと　門に立河生ゐ子のゐりよろしき也
あるまうりよれ　生源守へよしくちり立家の別業也
けしくぞうる
けされぬ　本所
大后しのそりの
それまうか目のやうの暗と年りとふて禁秘抄とそふく
ときり大后しのそりのはまふしくさうしそう
けりまうけり御帳なれはゆかんしして立ちうまり
宗申まかまてへんこと御へ
余のことの御帳なりし人にてしうり

和抄　文庫子ひとそこきらへん宿

こゝろ志そき　気てしもとき　本所　和抄
ひとつのみかどのなかしまて
坊宮こまりける
早世其後朱雀院立坊也
朱雀院御事也　周雨代東宮文彦太子保明薨し後其八子慶頼王立坊又
惟喬まて坊まれたりまりけり八年志
て先坊とアノし御の冬に三条院ゟ長御申詞して
よりさ惟喬は春とこ御延喜皇太子　文彦早世し
まして惟仁の先坊よ沈んでうさましや又三條院親子
小一條院八喜宮と辞しく太上天皇よなり給ふと
惟仁なるよりとひてよし先例なりまりぞ
のこまりして行り名目てと　此君八宗都なりてまし
まさとも帰参にち也たりたとうす紀有常也
世人ハ　うりくりよもしえしこう　和抄

けふ三ちしわ　古朗

ここのつを法ハおし給ん　久河海朗木

あすろくまん　乞朗　古来菩薩乎り和歌

有天弁乃まのやうよ　ら多め清しまのよ行り

みちの清うくるこへし　おもやうのここち叙絡多ハ記れ

これるより相いるへしとおしけるや

朗みるハおもやうのここちと叙給つきおしこれ乞み河

南に太三王皇太子を法語つち始し玉おまさるとふ

とここ淨梵王太子誕生附乃弘多仙人来おし流基

おほみなり

弁しを法うしこき　才ちの字清済乃　一禄合玩

有天弁ハ才行乃人也り　梅この吟より出ぬハ法可り

いろきをとり扨もて　乞朗

やうを待う

よをみこ　無縁也

あくまりそん　徳曜道　如手道ノ法師之和歌

ぶよくまりの　ろれとそしそくつき人ハ時字のて行う

ろえこしるそくり無字行政如無偶徳行ミミ人不字

不知道トモ云り

先帝乃晋ゑ　さ大帝一ちて　朗　菩薩浅行華八

ウタノ仔川ミミ又ハ中てここ

三氏乃まつろ人を　ここ久しくつゆろとミミ心こ稀を

おまう人　ろうちきこ人とより

涼しさの無人てのここ　　宗鑑の文字のま也
おりしおくるむやうおりも我まうわさき也けり
ら村月光全体併り我まうんとと
ら村とまひまてらよ　　紫陽ちまるの村とまひまて中よ
ら人とら堺りまさ中国よりて
芭蕉ハわく村しもとえ　　芭蕉とまと芝見へと切よ
甲合少へて泣下し給
あくろく村んすりとやまん　　弘徽殿のまちりのよく也
ろやくは乃とやと　　左記る
作者女十二三ノ入内ノ手と同ハハツチ中宮ノ也り
タミミヒ折ヨワヤヤツ花ツ米ト世ノ人中セし　　宗元物語二ノ名中ヤウ
　　　芭蕉ト三上東門院彰子
くりきえ行さ　　くりんきとハ元服する人とき　和歌
元服ハ前よ姓ワタニハり行うへしと例

おりまさ殿の　　　　拝記る
ひさ草美人　　　加冠人今り　和歌
大義で是人　　　左記る
けそうんまろりてく
ミる人源おとし給　　　　治記る
ミクリリタルラミタチミワル人　源氏まて元服と武家書家の二ハ
けうりらまる人しえて作まを盛しちりや
祝ま下元服の時お舞ハミ十清涼殿の東庭よく
作前へしきて作り東宮作之服ハ南殿泳へ先れハ
安記まて作拝舞アリ　一段
書家まりも丸次しさ作り々　　柳の是ミ出ルみくり
作ちひよまりて行く　　　左記る

内侍せんしうけたまはりて　人にかたる

うへのみやうふに　一説 内命婦外命婦とて侍り内裏に祗候

すると内命婦といふ是すなはちうへの命婦といふ　外

命婦ハ臣下ノ妻也

あをきからきぬ　裾ハ衣のうしろにひきて大かたなり小う

ちきハ若きのうへにハ表をつけ色ハ清くきるなり　一説

からきぬ　こうちきハ上ニきるなり　ぬれからきぬハ東事

表衣ともいふ大裾ハうきあらしくこうちきの事也　一説

あらたうの中　小うちきし對して大裾と離て

衣と名付のあるぬ衣ハうけのつくと表ニ不用と

織物りしハ緩しきりく衣と同様し裁縫して様とく

男の服来りも女のうちハ用とく衣と名とのつひく

よ表ゑとて

小うちきのうす　二條ハ女ハ扇繁来とて唐衣裳

唐時表着（ウハキ）の下ニ唐衣の代ニきてけるにや

くしの入りかたかかみけり　あ吉之三

安達東宮左府　更[illegible]　以書説抄録丁未春撰

殿の令勤仕ありし文書写也

閑ニヲウスト ハ[illegible]ニ[illegible]　一巻内命婦外命婦ナリ

内裏ニ祗候セシ内命婦トイフ　又外命婦トイフ

外命婦トイフハ臣下ノ妻也

うへの命婦

はゆるきさはやかにて　清涼殿にて列なりしと

ていひ御神りとのひに　仁寿殿のへにて立ちたまふ

むとひしけり　をとめひとよ侍くこころ宝て立ちし

女御なとをいひけり

うちしきりて　おかしく　　又説有
高麗人のこゝろ　評説有　高麗人の事也　高麗人
禁裏　帝　執柄大臣家しかるへきの際の間ゝ布
臣子とてさて高麗人ハ　天下のおほやけ也　一説
みかしのいしそこらくらくちそろ　私く似くとも
源氏の君さんこえ眼ニ禄るとてハ東文陰く不眼の
ところの表ゑ喜方人さ時ハ落せらしく竹也　一説
こりの
そハしき福のうらしらけ　又説有
禄年ハ様ちりこけ給　徑説有
女まハとしこしてう十二十六歳すゝくし
この折く　天下開口ゝくし

おもの政好く須い　又説有
ちきその夫ゝハ源氏十六歳とこの
おもるく　政人ふるまひ也
思ふやうのさん人々　二の宮にハいとさと思ゝこそ
おんくとと思ひて　又藤壺のかたすしてしいそる
ととまる之
済りいとのゝ也好て八ゆきすゝて也て給ひ之事にて
同じ源氏君生せて給ひ行くゝてく筆本に又源ハきけ
一番目録に定めらるゝゝ皇子ゝしけ高麗人テ立ち見ゆ氏気文の流し
おしおとすの也源氏君の御名の事也
三けのゆとてこゝらくゝちそろ源氏禄ゑめてしくしけそ
同じう入の天下の外の人ゝ禄々竹うちしい御ゆかし
一番源氏君の之眼と福るちゝ年ハ東文陰之眼の時の度々表する
さ時ハ落せらしく竹也

帚木　　源氏十七歳夏の事なり

巻の名事

なりもわらはにてゆかりにきこえしとぞ云ともしるなり

此歌ハ是則か作りとハ后の内とも云なりて

よりて第十本の事ハ物語にしくなし

ありときこえて名ハ此物語の大意に相当せり何ぞは

其理明要なり夢のうき橋此巻に因也

又人間万事ハ夢なりけりとのたまふこともいへり

此巻ニハ序分として一部をつらぬる合なり

桐壺巻ハ先序なり

ひかる源氏の名のミことごとしう

前の巻にひかる君とつけて書出したる名ハもてはやし

みえひたまへれ甚世のそしりおほかりけりと云ハ何ゆゑ

すきのひかる名をとかくいへと　源氏君の好色ハ世に聞えたる

かろびたる名をやながさむハかゝりて人ハ実ならぬ下しもさき

しのびたまひける　　一説ひかる源氏といふ事

一説ここにしるす

かたのゝ少将　古物語の名也好色の人の事也　一説

ありしみの物語にハ名取の此判とてあり

また中将のきこえし　きとりて交野の物語なり

源氏ハ此比ハ中将也　物語しるしとゝめたる

といへるなり

大殿　一説勘　大臣たる人をおとゝと云ふ所なり

ちゝにハ昼間しるす何也

すゞ夜晴るのさは　五月ゆくのすまするへし　顕昭注三月
そして
治理改事也とと　顕昭しくりし衛文願也とと　五存待治小ちと
寒りとまん中ね　此中ねハ相模堂所けん也いりうとと云事あ
御恋らりと畢竟事ともくりしけつと
浄瑠也
不定の如治とへつさゆへとうくけり
ゑとも見とこうう
ここハすつ(?)うつてもさへ　書籍見と清とへうすりたる也
まかそ　ミうりの常しのもとすうぬいふり　下の人ハ長行のうへくたも也
え乞とま氏　こうすりに也言く十事てゑとくミうく
言治んぬハひのくしうつるへし

世恋これハ三すしと見えはくちきさハ
此中ねの詞也とりもしハとあとの意也
うたのさけりんけしてあるき
ひハ不用とすしてあるき判の次第くもも　そりしてうるとよ
ましの女えくと人
母しうとのいつひ君恩とこゝ恵とせんとの如遠　寒行うましとてく男女と
おやまとうくきひ　一派すり
ありしくまれて　此中将のうるまるしとすくうり
て清ましてうらひくうく　新し
そのくいかなる　源氏詞
ことをうり見え　此中ね詞
此ちかくこのくたちすしときさうといそかりとかんゆへとも

宗下と宗匠とハ去嫌ひもしくるしからさる也
その名るくや　久しの御代
きゝの名みこく集めう　源氏一種
五十氏人の　又一種も種と見えしところあるへし　一句
まりのかきゝも　ある以か批判なり源氏の流といふ
久しき御代ハ推之か女歳目録かたくひ也
さゝハや森ハとみえすらの王と　十かうしのくらひ
みるへし　生脱ハ中子のなるへし
是らやしといひて　別くの家の數也
一種動大音アレナノ文ハ入ミテ見ル[illegible]
表ヨミタ、キ[illegible]
サリトテ[illegible]
宗匠ノ　かとしきんもすみてもむさしくるへし

非恋之
恋之ハ任せぬとゝその二三句ノ人のと又見え
其ハ前定ともとり出しくいふり所用ハ大段在
乃政務ニ何つるぬへのなし　一句
雑之
クワ[illegible]かみり　御やみのなも
春のるうしきうかあみて　明けの上越しりもの根
御[illegible]中のぬ御老入道しりなり　相葉工衣ノ數
家つくて[illegible]
[illegible]てくりきにて[illegible]　源語し
わもの[illegible]母のおかしらいひ
ゝ御[illegible]も　五三[illegible]ノ數し
ゝ[illegible]てすく[illegible]人し　[illegible]ノ數

まれよしけりと云つたへ　夕霧のもくいふ霧や
ちかき所ハ　夜霧ハおもしろの霧も
さやうの事ハ思ふとし　法師の心にはふたつのうへの
と思ひ給ふ事ハふかく　何事もかれかりと云給
ふるや
云ふこと所なるとも　汝そかへ八ならむふとまくり紅葉
其趣なくしてかゝる所ハもるへし　一義
大納言しるしのありしとき行く　其後のことをしれは智者の
仲平ハ指貫腋しく大納言しかりけりくる
よすかなるなり
母ハこゝろく思へるなりけり
かくなりけり一ハ母としまりてこそやくにも　二義けり一ハ母に

おほくの母とつたへたりハ　一子相伝
柳との大かやけり　此段肝要なり
とすなはちなり　さてされは法師と思ひたまへ
まてみゆるしも母中のおもふ大事なる法を
おほけなく法師なともたかくそ維持するの
ここにふかくも
おほかたはまことのものもあらん
おほくこそ思ふまさにかくあらんことものの人のためにかかる
ものなくおほくこそその心も
ぬるとしれはわか思ふてかなしきは　此義とて
たとへ身のほとも思ふてものハ母もとこしなへく思
つきせぬなりとぞいへり

ゆふりきくこゝろけ出く　一首ノ心ハ女ニ思ひかけ侍りし人
おもひとし　おもひやりのゝ也
こえけりとし　言ところ入りくるかゆかり
六波羅中書兼九条大なる人也　此殿ハ出入てたまふ
なにゝかしこそしかのと　みるまゝのかの也
とふと對してえとえり出へなくしきこや
とおりても見えても　けたてくるしくに
それも見そえ出しかへしもひくゆかも思はる
祈かり又もなのゝの出ぬ又やかすとさ
みと出るかや
にりのなはこくらく　とりかすとして以とは
にまことしゆかりいりきもの跡也

こゝろ付よ　ゆすり付しま
あの見たるまじき人の　あの見たるまじきを上ハ
大事なりあのみ人も一初女のすきとのりみは
男なりしよすましき男の任人のすきとをや
此集人哀なりとて　任人のこゝハ哀と知りて
そこしきこゝろなくも思ひとみ作りしおもく
こゝうけりのつし口伊ゆきへ
心あてにをるを　中宮相也　ミハ世暮れとも
左源ハゆひくりしめやくひの紀を出は左承すよ
アハすもしおもしさゝへこゝにゆかりや
こゝろあてにをらはやをらん
のゝし鮎卿の哥三ノ数く　こゝろあてハ大切ノすゝめて也臣字
山女美ニ云世ニ人数ニ久ゝタ
ナリニテ以ヘドイトコメタモウ

シテカヤニトアリ　むさしのき
心なき

はなれはしく
秋ゆくころの夢之
いまはこそ君をしらくし
花るもなかりけり　一遍にや
をのまゝやうし心にうつめ
なかりのゆへうし何と也
由ありて世あらうよしおもへし
とかく世にちかみすへし
えんあるうしく
都見えにいらくし
ここいみそきまくも

かゝるかはみり
此段一部ノ肝心ト
本トハ種姓ナトトや
美之の夢也
まかるかあらうき
夕暮のよし趣
とや讃きし
かかくくのよろあめ

遥悲交其人トいへり　古今集にわれこそ見つゝ
りの浦トまやしくてかうかなまし
いらいふそれ　さいつらくとく此の歌かうし　又眉ヲ
たハせかうもう
うるしきこれなかりけりや　儀魏姚れの出のもろ
おりしよきの隙をの心てうすり　身れりし思く
みすのらしろゑふきにうんでや
うちえまおらん男をと云世しはりもえし
なふらえきなりとも　男の心らるをはさ
はひはうし母の綾に一としくめてえてけり
ゆへしとこや
まゐらへらうきし　ゆうへ中に姫女へ上之

すゝく方ゟり　上京の侍し定て□妻也
えんとつき　その妹と見のすゝし
御隠ゟりて行しとも　以下詞
よりしけるきさらひ　臘月後朔日傍の義也
きさらきや年の初にこえてきれて男のくるり
けるとんまりとそくりや母
わか宿やまちわひてみとくさは　男の心ニアヤニ手
ナリテ女ノアヒキヲフチヲモミスカサハトミエテ宿ニ待男
母かのし式錦ヲモミル（中ニや
今御しも行し　みそれして足
もくもたちつきわしけんと　畢竟ノ理也ト
ワカリモトイフ（ルヨリ無ノ批判トミル（中ニや

わかりくとの　然ところニハ畢竟不定ノ与ニや
ひらきかへり　香の勝ラスルニタルやうにかゝら
うら鄙也
ある君のひかくり
名所にすゝらくもし　君ニハ下絵ノ見ヘウヘノ書
スクリハ絵ノクミテ上ニキラ／＼シ絵ハ中ノ少しトリ下
絵ノ文字ハかくといひり大宮唐絵し十三絵と
筆楼ハこりくそのきるへし
如何見　似つかひかり
よ流とこうしも　是一家とりつくく実出
定てかみの流る文の古今集列ノコトクナル（こ
はゆ所にん世のとりり　文亀年は花三周忌ト

源氏ハ世ニなりてうち近つきそへてこゝろみれた
世の事思ひすてゝむつましく思召せ給へりつきそひ
し給ふ事也
あやまちなとありし御附
こゝろにおもひけるやうし　ひ衛のおき家トウシノナト
ひしけサニ此母の數ナル人そてより
てうしられおもひしかりしかハ
おほくハラトナレまなくこともトシキし
すゝめしおもひしと　サレはこの色一事まかせ
とゝしとおもひまれなき心ゆき　母の御おもひに
心細からんや母しけれともトて次第に人のたより
おもそとかくもかくにこそ
ひとそし

いひそし　きよらなるも
はかなきものと　かひなきものとしるをもかきさみ
きこえ又云蒙ニ
えらぬはかなきくさの　今ハ世をうらみしをる
はかなきかかり　二まの御舟金屋なるへし
ふかくこもれる夜　昔別よりかわらぬ文字詞て
人わかなき　わかきし
むかしも　一物也
いかなる世のなかには　やむなく今ひとしき人も
ひかりのそこの色をもて　眺こ梢しの色
こゝろひかりいかに　はしも夜すとやさは捨とせ
もとやこりけり　直隠せこ見えすして色もかはる

くらき涌すみり　男の哀をも
こゝろきの　母のことてんなまそ御思ひ
わかことえん　よかしき心常にこゝろよにふかく
かゝ涌かん
らゝゝ也
始思し　なゝゝ了也
ちゝの気れりてかとのてと　ら秋の気れりてゝゝん
ミミしよりゝく蒐無阿ゝ也　海の言わさのゝき
すをかしもつよ封しもミ阿也　山河とし西よ也
ちゝゝと　言もうん
ミゝめてこゝもあく　幸ハかりゝゝの阿也下ミ
わゝゝや

大納言乃事よ　誰もみまて嫁ありゝ　言ゝ人し
ミ大納言よみりおかゝのし言給ふや
こゝろひ人まゝん　の為く人也と聞りけるや
ゝけ　おしらき阿也
律の言く　我君ハ律也母ハ律のあり
いまうきさり都の念の事也
和泉式部の事也　里ゝきころ和とミよ絵ハ着
くりつゝ人きゝりすハゝろしゝうも人や
よ路をうけハそゝりも也　一阿
底の歌業こそ　我のきれしの心ゆり
路と出ゝゝ　路ことゝて也路をおけ是すとゝも
路気好りて来くしこゝし山ゝ千ゝり里かゝき

今しもありけることしこそ流行り出もありけり　乳母をかりけるくせしけるとも　月も見えずして　黒か面しるこえまれくしる
られんや
こころさしらることと
まめのさくてもいひし　よし　夫のめと見ゆる　あしきのなる事七
つきの不利と申るしわるかりし
よくも蔵めそるその家　川にまれかりしかし
え人をきりことうさくら　勝手すること　来の事よ
隔年すきなことうにし　かしよふり
章十七年而後与前未見迷見也
まるを流行けり　淀れは共のそ年
れくてもてして　そりうして

さ人をまて　女の様子とのまとめとも
いふやとわかりしかりき　さ行とし事なとと
源氏物語ありとかりけり　ゑいふも
かれか家の家さけをは　宗とは気すらく
むかしものそりうさそ　うれのかれしもとはさ
待てりけり作そんそれのかれしにつうと
待まはつの作りき也　うれのそ也
うのれりとそるも　夕れの作まいうりそれし
跳ねさしけりまとる也
くさわひ　後の也
くそしうし　くそとそみれ
躰とし　かんきさいふき　秋　わそりしまえ
大そと男をかりやすると也と

てもひくくと待かれとこそくに切て添の詞にそふる
へ一まるなとみのくちを事いふそときさとる
あひやう　脇句
おはりし挿句とこそ
よくて作ること先に　ちかなりしきを也
三史五経　又一座也　よ所の批判也
すくれ句といふく　世をせむおかりすとも
まくてよきり作しも定めうくすの付とくそくり
りお付しるうくをといつくん三史五経すんてもとく
ころのはの句や
うすのうさをやくるのきもしるん　さうのし付句也
小付り付とい文をきのりとそうり

さうの付もし　付句を一あまとしのかへ
えの句み聞は　評判るる
りりのえ人した。ときき付の心は　同じ次句も前の
家といつ句をすくのすてて
百のきしのかれ　思わ付るの所をいさけ
とはゆく人に付とうや法それと打ちゆの折りをとい
けしれしおるとへ事しくへよそきといひし世言
のす思わねてりの心をいとそくし五次付り
一三八人利のきん何とそく又ことしいハ人利付り
人は三く所り日を内にわかれり文言るの深く之
上五句の付しるのてりと三三次句りへ一大とと
の人のすへいてり先すそろいと味切れ人句わ今

さくも参れ人とは拝　北野村勝のとし
ありいはひきとなしよりみて
墨染おやしき浄土寺
吉ゟしてなりて　書画の脇ところし完
晴ら也渋紙つきのさくらが人けの伊しき
りといふり
内本丁へそて　源氏乃舟子れ参りて折る月一八巻上八
丁さそ折りも人又源氏の末おゟ月と作りし
大臣殿乃氏へそとも
昔同乎を　花との山やまりく田くくの経
二條乃院より折のすらりく　詳粉寄
紀たり　さ桜りに而しそへ　ひら屋や

結ひ人とやりくもしらゆるやうくにきさ雨
下備生とくとけそいふも紅ささふ人の御名
折ひ行れのけきと　うちとをちのらへすき
らさんおて折ひし人也
也しのとより　紫のひすゝりや
武部宇のこやとへいゆ君て　梅諸院を也行ろと
はりしうくし
こ参りんのとよる　紫蝶乃ちく八中細ゟみく
緒ら是七よわり
也く　むさみ宮寺ゟれてむをく一応
五しはくへ　紫蝶やちらりちとり
わくてのきりとらそ　源氏の君と雨後ささく

秋の夕ぐれ　[illegible]侍る

おもしろき[illegible]

今は[illegible]也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中将[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ナヒトミハヽヒトヒトヽ[illegible]

[illegible]一夜[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月ハ立帰りて　何ぞの月の氷り行る物やことうらみ

折しも作りし人々今ひとしく出家するにし

敵より立行ても　二条院ニ思召され

となへしとて　ひかきとニ之

ともりくてし　女の田よりの入そみ勝ここ

たきの山代志らく　有し清とて

あかくやニ海石と　言やニトハ山やしきんや

早下の人そ七出首もとうり　何とこめをあく

ひとりうりくりとニ依乃出て同りてここととよ

ありハ山也しとこの

童敬上　同　第十本巻ニ待人ワ子の歌ニ之中

也そくりハ思ふの志す乃くとゆうつきこ乃一各

前ハ人ノ行生きこすりて武比ト武成ニ付ニ從也

是ゝあわりハ界ト哉シタルヲ孝子蘭ニトありし文ハ

比ト三ヲモアルツ

まかしハ志筆乃の物語

江浦滄子長言　世間之愚人乃言

百首九
妹児余

けかりわ舟のうくくう

選中十三首頭語鵰鳥賊濡キ若深潤之静カ

泛乎不繫之舟淀之深潤乎波蕩舟往還

真人用心不撓動無趣向亦似之也同注ニ鵰冠

栄花四

子日[?]汎若不繋之舟

文選[?]文肉[?]助信 母和泉守後連女 助信

權中納言敦忠一男母参議保等女

わかき殿上月つとひりよかく(わかうと[?]ハ[?]つりの

あかき桐女とよひけるへのよしはかりのいとせね[?]

実白殿ニ[?]まいりそこ殿[?]へいふしきりのり

このさかうさをつらそのこいとかりけのしたさまか[?]

ときあかりなり文あんくらのよとけのよの桐[?]

とひなり地やりかる心ろしけりそしとおもしう

はなりそこゆとたへ[?]しよひ思ひなりなりける

なりなり

空蝉 かのひとつの撫なり此巻ハ空蝉の段也 篇木

巻ノ心てきしとそ並ところ本しへ海のなるし

ころり

日ましくゆくによ 本[?]てくしかなかと

源氏君好色の世ならいり

かの何けるこ 後の大事[?]しけり[?]かなりけるや

はし物[?]よ うちのこなりすなりひて物かなそん

三筋[?]

ここにあやなん 久宮[?]る

たゆかなんんとてそこて

ハ[?]代ふるへし

一譚御哉[?]

文院たり紅あけし不明ハ仰みてしこそ也

ひとへのきぬのかうしう

七夕ハ　去来る　二盛しなこミもし花　一花月
まうさくなり　久気る
茨くろ見り　まことさうさやうしや
ゆりハ　さかりさうゆ月しちの字陽紙みち霧
ナカハ円むも
声ハさうの気をつるや　人の性そしさうの夜　一鋒位ケ伊
おのれハ　奥のさうもさうへてとこ
又有うち人
ちいさくなるめ　世
そうのさひハ　武持し　同我の何も
伴ふの佛　蝶蛾のさうひし
たしへすくにおひく　完蝶朽し

なとらし花夢てる　朧うしてうく　一石
ひとひとるこれつとしり帰月しに太花
あつても　鼻のさたとふえや
花の月ハ　完蝶ハうちうぬとうりみれしに花延
このきかの人ハりハ　ほつのりそすしまろくミ中る七色みあの月の完
ゆきこてしく　又気
このミひるりゆく　行蘇り
尼クかしも　屏風こや　味詞ニ入内
みうるへし　便りなまなしきハ月に
我中よハなる　ゆしゆるそ　寛かさうしとさう
いそう甘しきらね　今夕つきりも

拾遺二 年すまふの[illegible]に[illegible] 出生よみて[illegible]ハ 忠岑

夕かけ 堅乃[illegible]蝉の月のうちの[illegible]に立

ちしとも 大江[illegible]

ふけなきや おしとらの手ゆくら女心ふけなき

やよよ[illegible]りくて

とハ三とうのやよすの代

いくの[illegible]しとも みつれそて源氏の[illegible]

[illegible]すりうち

なのれひとり忘らの声 夕鳥のつ[illegible]と[illegible]の[illegible]

[illegible]と[illegible]小夜の[illegible]の[illegible] [illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]やりと [illegible]

[illegible]つ[illegible]と [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 源氏よ[illegible]

[illegible]

[illegible] 三千の一し

[illegible] [illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆくゑしらす月をまちいてけり　夜もすからのひかりて

なかきよもすからかくまての思ひとまつやすらのとみと

もおもしろくし

あらし　夕顔のまたたまりのきえぬるみのとは桔梗

はつきのせたまふ

おくつゆのきえしのは　それゆき思ひすまの見たまふ

わかるへしくしとしく　人まちきやすきよすかなを

其後文龍しもかるとされとわかしきはやすら

とにかかり　一條勘

はかし西安の　大名の年よ細まて入まて何見

せまりとうの様かり　世のまゆ久かたともとるまへ流

わしはらくのくまと　人まゆありて名をかへ

結まつりね　こゝ地田子舞かし

よくひとを　源十六才　寛喜廿四年　捧巻に

一条宗廿トアリ源氏廿七才也

とふらひ給へは　是房に妻女ニテ既院石嘉

こゝらひのさらのわたりのあはれに

花實ニモ見り　一條勘　和抄

同云女ノ指貫ノキルア　トキル時ニカ一着之

馬ニノルトキ指貫ノキル也

中居て　中ねのまし

たふ成しこひ　花ニ丈夫トアリ又ニモ民部大輔

こゝ相伝カモノアリ　仍其ニヨルヘアラス

八月十五夜

まつりの作　あはれにこれ同じく花

名のはしたりくさて　　毛詩云
うたを　窓ノウスキ色し
ミとけ給ふし　　ミヘて二ヨるトウ洞内本か
やうのまりすとも　はかハ心りとかゝめり
行未のそふのもうこきよの間ウタカハシク思給
しこと　一匹　四足ように源氏ノ君ノ思召ニ此四足　一動也
又意乃はすいふゆるくかくこころしき合はかすり
ところ　一部と
いさらふ月しゆかりかく　　田ゆかりかくゆかりの息と
一動　不意とまた
右手　　これしタノ新のかれとこそ
ミとりしかく　右手まの使用思ひしこと

岩も荒心もしらく　　岩の荒心月をくとも新
すりと志らく月のり足岩をと源と白り入り次
志ようせし人重くすてるくかりきかさ
外への
花川ましき下来用して府し
太合家もはらうすへきも　　列茶庭也　私
所ちかう　　タクハおりし比のおまか成
蔵乃志也へつる
折りひくのかへりとこそ
ひかり何りと　　麻とこうしまりし比のお人今た
まつりみきまの生ハ此言大きなすゝよらく
夫おりハそうなおハつかりこしとおハなさう

云ヘ又今案アリ此句ニケニ手トケニテ下ノ句ヲ世ニ
なくはとはつ句ハてにをは名付り紅ノア
わらへ来て有り　わらへらも涼しも　秋の
六條わたりにて　源の君の御もとへ夕日ニテ寒ハ
御つくし
とまりとゆきし人　夕顔ハ往乃覚
えわらハ　夜ル音し何　思ひ庭より九重ラニモ
一動
上臈らしき　一動
ゆふとひ里てはよしみし　何見りの子乃
戸ノ間ゆ
渉らかりけ是ハ　同何見りの子見舞ノ合
ノ秋筆も今ノ世ニ貴ノ肩ナトノ科トモニハモとらさ果

大將信ニテハ武者而下之　一動
泉名所の名は　山寺むかしかへこれやと
河内丹ニテ西日トニ
うハ枕して　思ひ寄りの庭の　一言まけ今
遊ニテツヘミテ外ヘラツスラ之也
ゆめむすびよ　夜露の涼しけし
ゆやり　思ふの字すらミニテ　一動
共の子とも来てと世し何見の中　源乃そりこし天
地人　共の渾へ三五也
くらし人乃年城　比三ハ大くこそ結て年しててく
りくゝ　養娘　此中年ニ
日々前はこれ之出わり

あはれともしく
雄芝谷ゟたまへし人
かくし源氏のしとめくと伝はりハ言本しけるを
やうよの人のまにハきやうしもつしく人ハてま中
ニや未得ニモコトツカヌトミユ又かうせきてしんて
られ侍り落也
源氏のこころ
わかれの井のゆうの　十七夜余緒の伝はりけんや
おりしかな　源のきせ露しけりく
わくてとかうしく　服ゟ衣血海き也
みうかうひおつきら　此御としし出言もとて
かりのけりのかたところ　桐壺也
けりまへこゑりても　法流ゟゟと事ゟ旦ゟゟ伝り

これの物の此　ゆきし世をも旗り時のかも
物中夕顔との冬三年計とて二年めし玉
ろうべせうなり四年めし源氏蓬生ゟ五年め
よ玉かつら物国ゟ下り給
ご怠をと　錦　蘇行
きぬかりよけり物の心　右為母もゟ
みかのよそれめさしもてりしも
後のことを　定のとちわりゝくしさ
なりよからや　九月廿日ゟまり宮のうま
いとおりき
物いとうし　右近もこありこゝろをいつり
をかし世ゆうよ蔵ありとぞ

と侍くなりけるかな　伊予介へし
とおもひて　源氏の君やと許して何せとハせす
かりて田舎へまかりつ給ふ源氏も又すこし心なる
らめてつきたる紀伊守の許にも受領のことく
思ふなるへし
かねて空蝉の事もて給へし　荒人かねて申也
さりとも人をもしのひたへしとも
かつとも歎きの　こと哀にて何事
ほのかなる風につけても　かつてと待ちと源氏と
かねてのさと思ひを知りて色さまの気色を
いひて知りて源氏の又ことにありつる心ありけん
きこえ　我思ふ夕（夕ハ心ナク時ヨリト也ニ又思ヒ入ルなと也）

ありしより心ハかハりゆく　施し給ふ事に心つれ給ふ
この事何となしを　揚名介ハ嫡女を又人ハいつて
よすかとする一人ハ上りす　和
なにとて　けしからす
世の人の思ふ秋のくれなる　主人大臣の秋の夕
ときに何ともすくなく心やすらかに心しはしは歎けり
見る程の御息所ともなくし　なほ不遅侍也
伊予介の
とこそまことに心のみ程となく思ひても
源氏の御方のすこしことにもの心ちすへし
何のことせさせ　なにこころものしたは
たかかりハ古めかしく堪へかたかるへしとろ
せちの大事の人をやうし源氏しるしあきらかにし

御子は源氏にあつくへミおほえさせの也
志かんものおりにうかひとしとりのく言葉
らのつ録りし志としのとの言葉と心得らる方御ある也
志とんつろのおもしろくとりの二十り空蝉といふ
西へとつ崩されし　河海

若紫　源氏君十七歳
北山　わらはやみ
こその夏も　よにおこりて行人
山の桜は　かすみわたりにけり　西面持仏也

おくつるはいらく　對のきたるへし　河内方に
は之人とけり　うら乃本宿りとされ
しおもしこ案の事にて
やさしくミゆる也　信教乃意すへしとえ
きよけなるいはい
又ちのこと男女わかいはゝや
いとおかしうもしけり　とまかれ給ひをまほしけり
ふかり也
中の山をみしのふけ　なかて人は一行也
ゆかひり　いろきい也　心の字一行ハ濁て行そ
そして堅さゆかは縁ト云
家つもしかし　そうつきさい也和うみさる

あるへし
京なれは所えぬやうなりけれ　何ぬと尋ぬ
さハそこ国のつきさく　いくしおるほつてくみと
いひしとも併はかり　條を乞はしけりとも
らうに宿を　芳のはなわりしゆえ
こほきせとち　一様つさとけるらり
母それゆへありけき　東為ニハ雅かり
秋風巻ニ大井の庵ヘ　筆の教をノトミ之事なれ
給れハ母ニ雅ヒテツウつきしや
ましたもさへなりは　今りゆかれとあそ
そこのみそめて　和泉雅国見
かまとこうよまりたく　ゆく所かれし思ひ深き

其の篇を
象ニ　鳥人の鶯をとつうや
まゆの所によりおりかり
かへ所しつゝらし
おひこ人行りても
抑ヘ子　か御とし
ましさこ衣の身ひて
きこく三ゆうて
花の伊勢の巻ニて三ヘ
以前とこと宗にトミヽ
書林まかとこうしも深く
世無左近衛とかり
手の日ひてやまひつて御と
山風のやくし
稱むけるる詮經
崇徳院御詞花の勝也
法師無名抄とそうら
業平公中将
川部の所詮経するへし

とゝの名をしらくよ
ひとえもの絵やかた　やほしきほうし
夕立ノ事ハイトヽニヤクヌ我ガ袖ニ秋ノ夕ヲサヘテヨミツヽリツヽ　此ノ句ハ未ナシトイヘリ　拳ノ友人ハ
此事ニ於テハ
ほうりぬる人
よこし志をきて　かね　しかるし
此句ヘヒ面目ナル也
いとこかいとてし
付合ノ句
サルニテモ此君ヲ兎ニカヽミヲ見テ子ノタカクリ是モコトハリ
ニテラス　又アヘテ云ハヌニテ只ハラサナキノヘノコトヲ
ワカニキニ行ヘルトニ而ヤ
志つしかりとさして
かりし也
信孝の初見ゆとよめり

枕中にて花ひらくる　かの草の中に見てぞきくなり
ありとさへ山を見上げ神とよぶ
ただならひとこそ入ありける　是ぞ君の詞といひて秋を
くすれの路をここへ渉らせ八幡の宮を見て是を
アシス又今ニハ宮ノモ源氏ノ御詞ニテモ一秋作
アオトヤ又ハ源氏ノ作トアリ京サニトラ
らり川をわたりてまかりて　一線源詞ニテ
さしやとこの面目詞て　とけくもなし
沖しくミたし　見し　これも源氏ニテヤとこと
かの一首信と見ゆ　秋の
ひたりうとこも三代集にと
湖見申しみてさこに行く
信孝の婦人来りと見え
せい清ニ湖ノウロミフシトラフ

アリトモ入リ
ミや人てゆきんたる人　妹世の姿ともと
出わりく下さひ詐りくかりハ　おまん信紀乃云ハ臨王
お母の心深けて源よ詐しくア志氏源ハ畢下の心
それ佛母をかしく若姫乃とと一袴ミ伊院ハ
此外ミし前の若君人氏付けて若姫と
おく山の紅葉とかミ氏　ミし付けりくく御勝也
獨活くそまつる三姫く信紀　取乃行人をくとこ
くまりとミて信紀ハ忽るまきし様嬉め云旦も
おことしや我の付けりハ　源乃信与三シトナリ
おハくて乃君のよてものとよろくも　又下の人ハきてる

心らく乃奇異ん　出雲しだり付り
日むの十ふ氏母と　忌くそ旦ツ人よりうしとセくとみ
とおつき　なりくき神と君母人此云を経ら
まれくハおきまし夫　きりの経りの詞のやり
おりと恨絶
とおハおとふさりて　丈婦の中しき一年廿七三尾アラ
スト十リ　一袴
おりふしとて　かちと行　又今夕にいとセナフキノ
さらハ何ヤツ人ウラミシモセン此云て叶し
多歓七家ハてとおくて　白ひやうすりと行てなりとい
ウワリと一てくらり　多く人ハ白やウすり如くなりしとん

法こすき
なりまへ　しりまへし　鈴のおとまでも　和り
嵐ふく松の風も法くろ　公卿ハ孔の上のとしよりり源氏
めまの書ハ公家の作者氏くらたまてくよりり居
君の作者ハ　一向しれのさしんとやうも　一勤
まうしろそうすと作り　おの文詞とうけれけり
すかおり作りし
作きろや月　おの大津氏ハ子とひいし切し位え
なミ竹ハり　一辞すか
なミ艶ふれ　都古のことく中くやの名所り作き
あり虫や新古早下しあらうつ虫もけりとこし上さき
ハ其后しと云製らうくさハ源氏と綺らうくさこし和ら

アサキナカラヤハハノ心
京乃こ乃　梅室大納言家し
旅つかの宿すまれめてり　其宗言も
たしきこころしき　ゆく田からんとハさしきハ吉
無しつうそれとすとされくらすを　ここ
くさ御の山そ　くさきかそ安保江三ふ氏乳に三みり
見そまま又よ子よまれすら　法ひもそし宗のさうこしく
こし宿のうらん　やうお其后公家のうらしこてし
うちまりしとこや
茅とさミ深く　ほり赤天こ立てより
そのうらうしたりひろ作りて
秘らみ心ヒオスニイヘ三おがツくシムトこてアルハこシカ作子ラ人ノ
子トこテハ孔仏冷泉侍従ナシ真ハツシムト　ミテハ在カタシ

むかし清きの孫しかうひけり　也より出たエトいふ名アり
東乃浜しひきつくろひて入れまつりぬ
こ枝し雨しのんぞ江のにうる雨ハ玉いてたのれた
かさうぷらつけし今宵ときられまうめ見のかりとも
源しみつひ済み清きかりと於りとて　手に於ミテノ宇源猶吹ト和
紫式部と朱雀院の御前　歌集の贊巻ノ御前
のうちや末摘花巻ハ様経の題也歌集贊ハ紫式部の中
末摘の中とし侍るや
こちのう月花　九月日也
蛍雨と　三やと雨と生ナれ日文表して無流そて
そり之御成の中よとしりと懐胞ゆかり中子
生しなうら湯蛍雨と生フてりかしそさりそ丁一様ハ

此稿しらく入らてすしとこと
わかの浦し　華のわきこし延さうこ
おそまて清ん　気ノ初音とかつひくへるそりとこと
奥文ニ不末勘
此年九月すくしく　十月上旬清紗花咲其人
まとまりきりの巌なん
此物語のさう也是又大切なり誰も知
拵ま代すりかされ　一様薩天の何ハ未考也とこと
可勘
車の浜うさく清めろ於りつくろふつきりと
挑芝旦一余れハここてるのまこと仮也

若浦に言成云てハ　世をは夜はなる光をなして
大史か御も　西向となる　二ノ丸居ても　大輔も在りの一條
中根休庵風ハともかくもさてなれ　こゝふさま
うつゝも所もかくりて道々に見りし太夫文字と文字
末富
なか錦をして切れなるを　錦人の花をなりて
うかんと所言也となる
加保男もうう之すれ　我モ日ヤヒトト折リテナヤミシ時ナラリテ一行ヤ　和相むらやまの梅ノ手本ニシタ
姑蘇城外寒山寺

末摘花
桃望の垂之　源十七歳の二月のまゝり行年のまゝ
まそのすけり暑寒またすへりのまゝの見え
折てもま　錦人にゆめゝく出人うてなり
末つむすのとし可にた
タゝ分の方をそれし
タゝるゝ分しかれてまゝ道きうらへとやうらとの道
おもうしこもうらとはね　念と云系は是和するの巡
てもうらけなん人見　もし筆本の地振りしりね
ゆしうるも
二帝障のその
御りや
無影念大輔の本宿へまいつり候て

かくれ家ハ忘れ給ふとて　身の今は恨めしうてこそ
とひくしと思ふしこゝのまゝも
いまひとへや　酒のうさ　気付河海しみさゝり
絶頼しうの言のはも無つらきよのならひとさし
なぐさめかくれしの一ときハ酒すすめとぞ忘れぬハ
雨ふり行り
こゝ忘るゝ人こそ　今宵のなやみ忘る人をとぶらひと
のきばすさめての心あれものうき人ぞかなしめり
せし神なりも　気をはかりかねのなけ
か母のうもえのみをそむきえし
雨もうしかうしことゝとへ今宵のさかり
世にありしをもつく　同じり如何したかなさぬか

天狗なこすり給ひしこそや　気一勘狗気なりしか当気にや
入夕也
今はしはりと辞せて　源の行ひものゝやうしきと
情せるをと知ひしやうられなと
わりやうに　わき同心
下総之所おなじ　せうとおもふ
言うハ文ハ三十三付此頃こしや
琵琶川行　此時無声勝有声　有幽愁暗恨生
とこま　かゝるまと　寂寞又九町も
れとなりハうそれて　主ノホトヨリハト源ノ思ひ
朱雀院行幸　わか忠要とこそ此御も同時ニ
夜のうたをはうまうと　蓑手をもしなそ手ノ細流
秋のかぜとさそふ何のうし

やれまつりせて　三かさの御山はありとよむ也

源氏同車ノ事内三ゐて山王教ヘて相伝ニ甘

みかやとうしを　西尾リ之ヲリ右ニ今ハ人ノ笠ヤらりや

トシニ〆タヨリアリ

甘楽のすゝしくて　甘楽のやうしれくて

うつ也　書之ニ事ノクシ之之ニ代タ歳多ハヤゝ

ここ之

まん後にひかれ後て　まさるものこへの所へまかし

とひかれてそこまいらへし

大ひのちを　今の世のうりも大なる中皆晴有之

大ハ大三七一大ハ大サ三ニテ所業器ニ竹切々物首ノ未ニ用ト一注ニ一勤

くきりもいすく　なろそのの御事也

おとと然ふ　私云吾ノ井ニ於テ王ノ梅ノ木ヲコソ我モヒトノ中方ニ於テ於ニ我モ今チ立ニ八ハトニ同アリ上ニヰニ未リニ於か

とむらめく　貞録同書ノ方タヨリアリ

今成のまりひとしらく　山城乃井手ノ玉水

神楽しまつり奴と　神楽誰ともなし

ゆかしきこ　おきんしときこえ也

ものきこゑて　生まれこ代をもうへ

みつきこえ霰　前ハ若ヨリハラ内々ノ

一注　雲ノ事ト云シウハ年トハ中ヨリ上ノ同

まうしてくやの御まてり　さんろうん也

けふよりもきんを　とけふのすへにかて

と讀リ又つらゆきの歌ナリ此ハやうことなくへし
花とちり行を見ん　花しほ浦に風たちて月の影の歌アリ
此歌の作りやうやさしけりわか紀氏の家集詞とこれ
末の松山の浪とをたゝみへし
神つてうしもとより　花院五首
わすれぬのは　折節ノ哥の待ヲ吟セ源上勘文集ニ雪
ノコトヲツクリシ九句ニ
よるの猿丸太夫の　源の兆州勝ノ
御ゆきえうへふしく　花しにわかやとるの
折りて同色ニヤミヨ
今年の雪をけふにそ　源の門て右清し
せとうち浅くりて平家の後白梅の花の色

こ風俗の哥と云ニアリ奥入ニハ求子ノ哥ト云モ云々
求子ハ清和ノ御時ト東遊ニアリ風俗ハ別ノ事也ニ
一段高つくし又ハ次アリ
住よしの浜の　ちはやふる松の神
みな神もあれは　ありそしるこそあやまてなす然
あかるすむ世にてとる　しかるたれノ紙つゝみり
はつくり時のすく　源氏十帖
霜くるくて霜しへく　但馬ノ守ツマナリシ女ナリシ
けるくくそこしみそく　そきふうし川けるに
すへし　上トツカミタル脚其ニヨセタル事ナリケル
平上紅ひぬちう人　一役勤
夢ノから田子　業平ノ小野ニ見シノ哥モ此時ノ

さゝらあらそつきこや
おいらすつりきまし　皆とかめきめの事也ニテト
いれのこひのみ　酒肉ニハ砕ルニ害シトテ
アリミ年仲カ　ヤソニトアルニヨリテ夕ル
ヨロシヤカテ年仲　同仲ノ字ニ三句ヨリ言也　一会勘
待ミえ夜てこの
ミ梅の花兎角も　ミお代へつくこ為銘ミシタル梅也　一勘
らみの花も四勘ミく　風信ニハたらちをとはかりこて
やまうれとらうもらう文字文字に　梅の花をふみこ成へきこらうと
ミえての花の作もちやとはまそし　同ミ六の字の用とて
なりミ風信ト有ルト列ナルこひ白　朱子ハ東坡ミ
ミトミ之句　一勘合点一勘ミ行つ事遊ミ朱子ハ短河集

カテヤリ風信列ノ口也
むりみのさくろつけそうり
稚言也細书以かノ手毎の春久入も河　梅ミハ面ハミろく素ハ口キ
とハ三人ろくえけりくしき中ハ三ルれ　和漢朗詠
楽天和歌信家大納言左の作ハてものしきあれ多てり
なりけりれ酒ヨとまつりて碑て夜つくあけく
ゆりりのく御きてり朽と朽ろきられ三ろく紀
言ろつたりかりけり人ヨとききこて多くれミくろし河
けさりくしミろのさきろ[illegible]もとはりてミろのりと
とおりしかろ　ミとものつきて也しれそこアと
くえきのおもかろ梅の香のよ代張つしかとくミと残られ
とえの花とアをはつし此朽こつと言てとうよ粉列て

左夜もひとよおなじこころにゆきかひあひて大将よみ
ろうさくてまた見るかなりけり

紅葉賀

源氏十七歳十月より十八才七月迄のことありけるし
十月すゑとあり
朱雀院のみかどハ　一説朱雀院御賀にとある
花やかにくらし給ふ五十賀ト云ハこ（かうさりし也）又垣代
のおほん院ニ不同也院の御賀と云てし朱雀院ハ
三条朱雀院とありとも朱雀院余流ことまてありぬ
のかみのおりしまうと院也

青海波　輪台ハ青海波ノ序也ソノ舞ノ舞也あり
袖のさゝりた　源氏ハ中将にかさしみ給ふ
非常の気色　又云
然ハまよひこし　おかしう見ゆ本の
ゆくの神かうてうハ　唐来のかうし舞るしけり
りかうしのかミハいさかうそれとも源氏の舞をゆ海
ともかくもな
ゆくゆきとも　御子の御里にまかり給て一動者
院のみこ女院とのうちおほせしゆて院の御子ともいふ也
たいふう　坊下壺お文ニ軍人とかへり
むひさうもなくれきう

いりけるや　けふ見しこそ　後秋分

第壽齋の御をまもれん　宿所もとめし

此中ねみトのていい　当住作七　一臣

こゝの法て　醫然方事人ハしくてくるとも足

四十ちは三月ころはまて　宗上安斎（祖）せ九月廿日法師

十年ちハ十二月廿日なりつて臨日ニ除服なアル九月ら

是も法や

てしきハ　正月一日ノ山朝為清法義ノ京庭ニ語た

拝をも見るしこそ

円喜すと　正三月中ニ法遅成ミて文人ハうしう

請ク作詩セラルヽヲアリ主上并執柄並色紙ヲ

為久保是ニ信西中行テ後ハ絶ぬへし　一酒

一臣　見るし高氏帝ハしハ七年ニ并文和ニ二年ヨリ始る

志てとりゐきしかハ　源武家庭ハ卯月七日門帝

これて三月ヨリ十九ヘ年四年ニヤクヲリ

その中の所ころのやにつけてし　壽盛寺正

二月十日けふり　此月むてるも

こそ見事あそこうし　わか家の年中とそめり

てかひしく是のりぐすいりまへし

今アクろしく是七

けれとりもりをすこと　大祓ハ年りもちり主家ら

さ法ハ文四ウチキハ御しのそうしきみ神を

御つのとハのののりそなす　中ノ総十九つ御読ヨリて

執りそき見中の三ハてもトイへ九數ニ下見しある事

手調よへしくゝしく　今案ニ手調ニテシク

タメトカケルハ手のそれのミ入りしを試調といふ　やう
ミ候りを試調トハコトチラノ手モトノカタヘ日セテタワルを
モヒラを試性調ト云　又保胃呂偈世利　ハ狗を試調
ノ乗也　手調ノ曲ニハアラスヘ三フ手調ニシテヘ其調子
トモラスして加それ皆ノ手ニナフシテカヘそろうてせりを
ひれ伝ふ時を試調ト云ハ其一拍ノ手調ニ子呂を
以上調ほ大ね入る　すね子敦盛　至也　伊目葉寫し
手調ヨリ後を二リ久ルハ是試性アリ一弓ツ　テウキリし　又コニ手調と
ニテ有ケルヲ手調ニシモクタルナルヘシホワロクセリノハ　ミテ
一コフテウノ乗也　手調ノ後ニテ呂ノシラヘニヤワリタルモ
無也ハ通ノ手調ニトノ入ルニヤ　又手調ヨリカリタルシテヘ

ニテ有ケルヲ手調律ト多メシテ其一ノ調子トモワモ
ヒモ拍子ハニコニコフテウニナメホワロクセリシヒキ所
ケルニヤ　一ツヒニテモ其習アルヘシヤタキ調子トモウトアレハ
アトタノシラヘノ調子トモウトラヘルニヤ　諸ノ物ニテ調子々
シラヒキタルヲ今ノ世ニハ着ハカリニ次第ニナリ候也
又手調声ナしハ入ルニヤ

ゝ孫ヌ女房ヘ入て　今ゝ乾人ヘトテ内書ニ秘候す
賀茂人ヘ是を　一徒
けうりて
ミゝうきの人へ　之乱　ミゝうキトハキヌイチラしヲト　一徒
乱声を孔朱夏ニと
かいけり
ミツカハシヤラスハ扇ノ世モヘ乞仰合又同也

ありのトくさいすと　むかしとしけり
タヽいとはやくやそへくりや
りりこれ友の　それの方にはおらでやりけるとし
かしこき河ゆりしを
ありこえ友ノ上も　川号ヒモナクシケリミケリナムニテノ
此ミテ源氏ノ人ヽ信ハ老又シハトナケキ給ヒテチナクサメテノ
森ノ下年ノ盛ナルニタトヘテ源内侍ヲナクサメ給ナリ
又ハ齢五十五ニ時内侍ノアモイタヽルハ又也是ナル[illegible]
返傳シタルヲサモアレトモニサルノ物ニハトノ給ヘシ
橋しらと　年ことにうちなめの
みハミラりきて　かるもしけり
ありつりノ参ウヽタフキハ時ウリツリ我クモフトイヒテ

成ヤシナヒシトハ[illegible]モノイツミヤナラシトクノハ其ニシテ
ナル物且テモシヨリハテニルイヤシキモノハ妻ニ成テナリ
トモ思ヒナクサメヤモヒイカニセントウタイノ心ニカ思
ウヒヤ人ニ時ウタウタウ人ニヤ折言モ人ノ付ル也
此中將ハツテテカタラヒツケニケリ此中ノ妙色ノ
心ミテ[illegible]ハ思ヒテカクメテヒツキタルヽ也
くさくりけりをん　阿田なりと名にこそ立れ
さひしろ　うたも桜花
人の月は　里やく妻にまちけり
[illegible]
[illegible]
[illegible]

うらめしきことにもすこしのきこえなく
あ人のかうやしつきまいらする所の見すゝま
みえはてしや
こや世中と
おもふ事はかゝる人のうつりはてゝしれの世
と知られんとておもひし[illegible]

同
ウツリ扇
女ノ衣ハかやうの時ハ紅葉かさね襲ノ源
ゆかりのうらかせやうにうつりかゆへに
女房ハ手ヲ扇
コモツ手ハ顔をかくし給也紅扇ハウツリの扇なり
又時ニ依テ五ツ手ヲ九ツ持ノ扇となる也源内侍紅扇なと
シキそこにウカソシナラス又トハ[illegible]

花宴
天暦南殿桜宴也　忠孝敦
案ハ承和次年ノ書之源氏廿九歳ヘウツル　[illegible]
花宴例ハ嵯峨弘仁三二十二神泉苑有花宴也
初也南殿花宴例村上康保二三廿南殿花宴
花宴之時探韻例延喜十七年　延長四年
二月花宴例ニ依テ此ノ例ヲ三周テ天暦ニ廿八ナリ
也南殿有舞花例ハ暦三三十二日ヤト舞人
ハ有リシテ事ヲ舞ハ[illegible]
后妻[illegible]乃[illegible]左右[illegible]

東坡ハ春夜ノハ東岳ノ名所ナルヨシ
此言ハ東宮ノ御サマヲ思ヒテ詠
日てらく晴く
そのそらのへ
しるし
　詩作つくりつる人のまゝ也
　韻字ヲ一字ツヽサクリ取テ作ル直作詩ハ
之モヒヲ儒者ノ定テ作古詩ヲ一字ツヽニメサクル也
詩ノ名句或ハ此ノアル大切句ヲ用ル也上ニメ儒者
ノ垂重ノ上ニテ其ヲ中サ句ナトヲリテ其上ノ句ヲ
ニ韻字ヲフタツ入テ其ル数字ニテナリシヲ一字ツヽ
アル也中故ニ二字ヲトリテ作リ出シテ何ヲ集ル
作ル時ハ名ニ一字ヲ採用シ作者十人アレハ五言詩
二句ヲ一字ツヽ韻ニムツ也十四人ノ時ハ七言ノ二句ヲ用
シルスモトワウ

也尤もなトワウ
宰相中将来トいひけり
　韻字ヲ探りてハ名ヲ池ヘ入
とて宮姓名何れの字を取りてとおのおのとりて探り給ひて尤豪し
源氏君の書宮を採りたまひけるを後の年也
よみたまひけるにいはひを退出方のかたといへるひ
をつき斗と云へり
年老らぬ世もなん
　切ものけしきかはせぬかは
何事も猶古代づきたるやうにて
春の雪にしつらふ舞
　春鶯囀ひ殿富し
なりけらま也一舞は天長寺楽とさまくして一番
よきさ舞なり
作りこいつり舞始
　源氏君ハ口惜の舞を

左様ことくらし給はやうを見て　源氏善きこの中

柳花宴　無やうなりや也　上吉ハ舞給りき今ハ住なりとゝゝ

なりしなりと人無てり　むた花宴て舞楽の後

例ハ面白てとも童舞人の例ハあるさゆへてなり

こといへり

秋の夜も千代の千よ　源氏の須磨へ来てからより

て故人心ニ物りて御身のうちさえ無之　秋なとの事

さしそれ源の之氏サうく　思ひても有ましき事

世の源氏も言語のこし

世のうちかりなくまいる　善言薬ノくて流浪

つきすかる也

去此今夜

菅家大宰府ニテ九月十日ノ詩ノ句也一説コヨ所ノ集ニ所アリ御アリとも

細殿トモ南殿ヘナワル所ニ元ノ三アリ

南月三ニアリ又ルクルヘテ

サシ之ルニ人ナリ

おもひなの中ハ思給ハやまひなハ　世に給ハやまひなりけり

まてとおほ思ひ御出よし源氏のこゝろの給はやまひ

ハ無給とおはりしなくし　思はれこハの字のなくなる

二千里外故人心　一説

くわんとハうとくひさく詞ニハ給ふ寸

又十五夜ノ月ヲ思ヒニ母テリヒセスノ三テニ乃今ヌル八月ノ気ヲ思也

上ヨリモ四モトノ月ヘカリ折ノ若月ニサヤナナルヲ見ノヲ

ホロケナクヌトヘ人ルニヤ

月ハすゝみ何

まろハこゝろへて楽の御まくられて　海の月を嘆いく詞ニハ

わりなくもせめ給ふもしハ人ことなる人の御心也
うきことなし　きこえ給ふ草の原をハとはしとや
おなしきさきの御ことをいひ給ふハおほつかなきを
りやとおもひなき也
とりや宮もおなしといへ　なをしきてさらう
とりのかきとある人にかくれあれ也
あるまて　源氏の心ハあらぬさまにきこえなり
こなたなるしるしなり
ハかくさま　此人ハ弘徽殿のおとゝ也　ハ右大臣ト
源トハかゝる御中なれハ右大臣ニハ心ヲモ置サナキモ
有ヘキ事ニモアリ　院ヘトモシマヽロサヒノアサ
キニハアラスト　源氏ニハ源ニハ見モコトヽニサナキモ

ハ扇もたまさかなるもてあそひ物なり　ことに源ハ小篠
の所のことくなりてほかなとに　あまた
はかなくてなりの　唐ニモ丈婦ノ契ヲ扇ヲトルト
アリキヽ合歓扇ナトヽいふなり　五首とも
　　　人かへり　所
帥宮の御かたなと　かくれ歌ヘノまうけ
おなしくそれにまかしなと　さ源の御心にて
はかなかれとも世の中とハ世のまことの心也
左大臣の御かたの御かたの　左大臣ノ御かたり藤の花の
あるはなりのならひまても　源の心に有過とも
うへふ例なるをてなり　藤の花をわかなの
サニヨリ紀ニ有ルヲ藤ノ御方ハ世ニテハ左大臣

一 然ば
保嘉(?)なり　　　氏家ノ摂家と氏なし済也
かの御内やう言ありしと　　氏家なん太政大臣
きよノニイリ給シカ四海静ニシト思テ清和天皇ナドウ
ヤ逆臣し
御代より申さん然けるに
二十カリ初嵯峨帝ト雅之朝臣ヨリ伝也　源氏ノ嫡流なり
四位中将左中弁をと
能(?)へしてまいりしと　太政大臣也
二十余(?)ともりたりし能と　上の御してくとのかめ
御子のまへゑまて　在原の女すれ踏三まいて
てすトまて三まいりまのれて八や三まいと別と

して其也　一勘
ここにうきし　宗なん申てききくらへと　在る御をもゆへの[illegible]
かれへ帝をゆかすめしう
相(?)をしそうくや人の心をひさゆつきも
やりうそめの御事をうて　貴方　備テ集　其の流の
これをとのらと流れり一かと　夕こ人へ代ニソカ人ノ九トニ也
四代とみへと仰り
文よきをやうかくと　かくらう御(?)をしりうするを
ここ御也
くらしうそうしとの人へ御うちて
源氏のらうしとの人へ下をりてかと也
うき侍(?)
新てこむ也朝しかつ入文モノ申し三上手

中々に見えぬかくてける
みかのとよりハ柳花花　　左大臣宮のましかる
ものゆへしらぬや
まして袖のぬれぬ　　まして左大臣の舞給ハまし
おもひやる代の面白きハヘトおもひやりけの中にも如
ての花
年中ね
左大臣是　　成年ニ中ね年よりも五
ちぎりあり　踏歌は舞をもちゐとこそ寄手わたされける
とりの　御七
かのかりの人とやいへらまほしけり
かたの内にはなかの事しとていへらるもてなし
わか前の花しおいてる
此ニハおもし桜二本ありト

弘徽殿ノ花のたむひのまとに源氏ニ貴妃ノ
ことハ源氏ニ云ハ我肩一ナトアルヨシ古大臣ノ人
きそへ又面白カヤ　我土京ニテ宗件墨紙
帳シテアリ
定まらむかはりきの日
大臣家ニテ有シ也　　弘徽殿御腹ノ女ニ多チテ太
さりかへりやとわが名残　　太政ノ弟ニ我肩ノ
花ニかへりやすきをわが色もしすきも言ニ
人を思ひつつまた中々京の人にこそ言乃心ハ
源氏君ハ貴妃ノ心ナルニモ
女内ニこらむとしおもひけり雨の日て
源氏ノ方リシナノ女ニ多チテハ又ル雨ナレハナヘテノ

サテ〻ハ思ハシリ源ミチシ〈此御詞也太宰ハ源ト法
件ヨカラ又ワタリナシハヤクナリサメ〈仰ハ汐也
ゆくのうへもなみのゆるゆし
そうてもおくらん
おいさをすると
壺衣姿ヲミ大人ノスカタトホメタル詞也　壺衣ニトテ絡ノ袖ヲ閉也
親王ノ姿ヤナリトミヤ又ラ　私哥
袖くらをしへうの折り
クコトサラスタキメタリトヨロシカラス思ヘシ袖くりとい
蓋ノ下ヨリ女房等又ノ袖ヲカクシ今ノ世ニ見大会
ナトノ晴ノ儀式ノ時ハ一タシキヌアリ又車ヨリ也
袖ヲイタスモ　踏哥ノ節会シキヌナトコト
たくさん袖いてつくへし
さてこの陪りもそれ

やうりやとまの声としきゆ
扇代らまてく　夜の陪の乗詞とられくるまたゆ
ミタてり一勅　夜の陪賀孫丸無也ミと
からとこゑのまね代　かくいひて今見まゐりて君
まとハ陪りましとよそり
えのゆひそうハそれ　くれとし
あわしきあり
安のみとすへきこの陪りハ出すしくうちとも国経あ
まは又ゆるうとおしいりもえ源氏の性也郎る
従さとおきうくや土云の居まと國らしかそ人命り
ろ里て國宮とさ所の陪りされ　くれとも机ゐらき
すて物形りひゐるへきん代にてそゆるとつうるやきら
感ミや

三ノ口々

一　善仏衛府ノ東ニワタリ二局アリワヒシ
細殿トモ細殿ヘ出テ西ニ一所ニアリ南手ノ一ニアタルクル、
ウサシタルモノニミハ声ニヨクヨシ連歌ナトニミノ細殿ト
云是猶ハタカハ文ゝ

巻

巻名当ヘリて是ハ人のよみける蓬萊敷ト源門侍よ
めり也桂宮の中を論とするなり公寒ハ氣高巻の
記ノ年のことし次年の正月初子の日ハ源氏廿一
歳ヨリノ色也氣高巻と公寒との中し朱雀院ニ中住
とゆうり記て陽明住大宰とも木ノ手あるへし　秋文ト定
秋陀陽殊なれ一勘也とと
世中ウクリて　桐壺帝門陽住とも也り
おかし命かわのやむとしもかくもあや　源氏是大将ニ任
しれりし給ひり大将とえとより
物をしてつまこころき人のやの代　夜巻の女院の陽也
しくのかさりんなひあらしなくて　桐壺陽門住とも
時時陽の所月ゆうゆへ夜つりとかひとらせ也

いまだ御さきハ　弘徽殿女御ノ腹ニ生給ヘル朱雀院の
御位につき給ひて皇太后なりつる
まうけの　弘徽殿の御腹の女宮の御事のやうにしけり
新院しめ給ひしかと　秋好の御新帝ハ御代に一度立ちけるを
陽ニ朱雀院御位につき給ひて新帝の卜定ありしと
云々し給ひて三年之の年ニまつりあると云卜
定ありしより三年のちくだり給ふべき也
人のたよりあるまじきかたく　桐壺の源氏と云へる事
やがて尊に六條御息所の姫宮斎宮の御かけし女御しよふる事
世しけり御年のほと　斎宮斎院ハ源氏廿一
さればこれ氏の年に斎宮廿八にいまだとてもなし
それをとひらる御事に　源氏の此ハ斎宮の宮に入

ヤウニコトカケテヤウヤウ文字ヲ斎宮ハ六条の具給也
何さりけるひとえ　桐壺の御女七権ノ名ハ帚木巻にし
斎院しけり
その時新院にまゐりたまふ　此新院といへる
前ハ御女三宮の御ことに　弘徽殿太后の御腹
御禊すべき人ハくらゐをかへて給はりて　新院御禊ある
之卜定ありて東河ニテ三ヶ年有テスグニ初テ新院ヘ入給
初斎院トハ大内ノ大膳職式兵を庁トシテ此ノ宮ノ
三年潔斎ノコト有　其三年ノ四月ニ御禊アリテ給ヘシ
急ノ前ニ吉日ヲエラビテ又野宮ノアリ則嵯峨野ノ野宮
ニ入給ヒテ二度ノ祓トテ今日三度ノ祓ハ河原ニテ入給ケリ
二度メノ祓アリ其後ハ初度ノ祓ニハ勅使参議一人供

奉ス二度ノ秋ニハ大納言ヲトアニケ法華ス正長武末ニ
そらりナテ十二人ハ勅使シ色ヲ取定ルトハ[illegible]
ハ斎院ニ人ノ年タル[illegible]せハ寒ニ入ハ二度ノ秋ヲとひ
の御返の歌のうハ寒ニ[illegible]ルスも

太宰きらしく　菱と母言也
よわたらし おかせなみて　年ノ三度ナリ
たてまれの源ア　去前のくらゝハ[illegible]ノ年もト下菱らか[illegible]也

○源ニ
揚升　一動　筆ニハ楊ヲ用ルノ[illegible]ヤスナラシアタさ
文字ニハ年ラサル也
源の句もし　[illegible]の句何り弱とらその[illegible]月[illegible]也
[illegible]

雖西ニ流ノ末[illegible]ハ言ヤリ給ケレキキテヲ[illegible]
ミシトモシホサスミヤト思ナシテ[illegible]源氏ノ何ナリノ三テ
給ヤタモ有シニや
[illegible]の[illegible]し何なん　源氏の源氏さし[illegible]
てし源氏ハ源[illegible]代語り
大将[illegible]の[illegible]　[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

手綱ゆるめて　手綱合てそう山行也其心ハ司馬相如カ

フウヒケリ五可及供モ

武蔵野ゝ末わけ侘ひて　桃園

ことまてハそらなれとふ行を　望女房しハ徽殿女御の

御しハゆかりにも源氏へとかゝりて行やく旦居宅

寛元八年比こゝに来てわたり給ふ　椎柴あの四中也源氏の

年来今はしすて給ひ桐壺の四ハとふりけるまへ一條殿

メテタサハ加ヘ一しこゝそとまれて給ひに行ておのゝきに人

かりとこゝ之時ハ心へと行く十てふすあるへきもして源氏ニ

とま宅御車てよろくよれおハさら人椎の日見たり給也

かくいけと行きけりゆかりけりの　左近将の家風ヲ入玉ヘリ

新年のことくりしのかし　云　ト定有て左近の将ヲ四年ニ入給ヘサハ

ハコレ有テ正ヲ文モトノニ未定極文ニラハシニストし

こゝろんかうヘ花持　花あるしこゝ今葉壱女ハ時ノ時ハ

寺院ノ上モ表持てこゝからかりんハ宗菓ニモ教しの子ニハ

上ノ持ラハキ文

出かるにハそら　ころもこそあとハ源氏の心にこまやかさを

諸ノ花さやしくひとのひとく思

扇見つゝ伏おりて　椎扇見えけし紙打文也や云ラ時文色

ころのしや　養ハ年ことに行ゝ人にハある人とよせり持

ゆかりと結ひつるとハ古る養たりつけれはきりのかくまゝ新

のゆかしとよせり御車てとゝひゆのしと也

花のころ上ハ　川与車見人ニ動未執モ四メテモサイチハ手ヲ文モミチアフ大原ノヤマ

此与在所ニアリ周防内侍云々モ周防内侍源氏同時ニ見しかえ

とつくしとなむ侍る　続拾遺　此歌の心ハあはれとハいはれもせて
深くなりてハ人ハいはて君の事ハたゝ人の為に身をすてつ
思ひ侍るにハあらす其人のミなるをしるへき源氏の君をハ思ひ
ひとつにうらミ侍りや但此歌もかゝはらしてもとの詞をのかれ
主有ハ無用てもし心ニかなハすとし源氏物語同時代の歌也
思ひけるに　源氏物語にもおもひそめしハ人にしらせす八十二代の人々はかり
はかなき人とも思ひしらぬ事をもなけかしき事と思ひ　又
何事に人にかハりしとひいまハ物をもあはれ思ひとる人也
思ふことも思ひけれハ　又河原院也
しつかに思ひしけれとも花をもちかくりにおかせと
歎きにたのミしとも源氏ハ人ハあさましく人もさすらへて
アヒ見リ候ニハ中ノ十ノコトヲモカハシナスベキ也

作者　川苔
かゝるためしもきゝしとも　源氏より六十五代の其後の御
事もなし
二条天皇とハいはれし　生昇殿ニ又ニ長の年とし
又なき人より此也　寛平のころの人とかく人に其頃也
とてもと此人の　ゆかしけれ也
思ひしけるにひ
のあきらかにおかれしかれハ物けれハ　曽禰好忠
ゆらのとをわたる舟人かちをたえ　ゆくゑもしらぬ恋のみち
あそひの物かたりのそれも　六條院
かきしわたりをひく　法師也　はしめかくれ候也
いま一所にひあふこともかな　恵慶法師

袖ぬらし定かに河は　山吹ニヨロシキヤウニアリ　嘯ヨシ千サミヲ知

山吹井手あたりも　山吹河　名所そ

いとしたやしは世をゐる　源氏四十七歳と

袖のうへやはりかくもや　山井ニ名ある辺

おかしけしけや笠ぬぐ　春ちらそけ御名ヲモアサヌ

ウラフエタリ行同じう季ロ十ナラヌ文サリ女タキ折花ナしたとも

うの花ていとて少人ちり物くのゆらしても　六条皇后の

御集九丈四皇后ノ丈ノ夫后ノ皇后ときこえしひとも

いとき

明ぞとてや　月をしもゆ捨てしいつやえに

折ふしのすゝしのばかり　月をも折りしと

新支は寺年ぞらん入佐へりし　時に入佐もも

やこ夜のゆくらん　新古六河ニ入佐かけて又野高入佐ント云

東河ニテ修禊ノ事有色ニ度ノ秘ハ是任禅行ノ時

ノ事ハ西河ニテアル事也　見る

身をのこりて御すゝと　着て見のうらテ源氏とか

まかりかすみかえ

ふるさとはりかけハなりけてしさしまされて

親子の道ハ一世トミユるりしれしい人ならかく清き名詞

玖ハ也元ミヨ君ハ月ヲ玉ノ如ク思ヘトモ下ノ気モ有ベシ也続ケ

くとハ与カ九心ヲかなしくへし浮トミヘタルや

任とて又てとりとまし　彦山のさとはかゝるヘし

ふ名しさひとし夜とても　三千夜五千夜のうらや

御ゆかり　髪はかるも　秋

こゝにかくれさせたまひけり　此集宗のよしや
今のやうにて行し　源氏の人々
をはしめかくし　太政大臣のまへにひかへけり
それは盈を持つ事に葵上ノ母ハ都より九十にしたかひ
かくハいてしもあるまし
かくるはありさるへく　葵上の源氏文に返事也　一部
秋のつきそひ　八月七日ハわかれし秋ハつきそひたるにこそ
思ひなをさむとそのかたは　左大臣息の事也　私源氏人の事十九の年也
うゑもこ大将殿ハなかりしを申し事なり　是三年もし左の御私の事也
上大将に依て世事なるを源氏のおもてにていふや
かくしのこしもかくうれしき也　是葵上死去の後ハ
廿日ころの事也

こゝにかゝりて　黒かみのかゝるありさまに行かうの事か羽の上
文選第十二郭璞江賦云　神蜧蝹蜦以沈遊　注云神蜧蛇
蝹蜦行貌　八尺葉もつれあひたる良とある所也　細し
雨止七七三行之　又日本紀第二蛇化為八頭大蛇
鮮潚濁遠蛇　ころもう同文選　心永正ハ八九注し
今よりの行末としもこゝに　人とかりとかハ顔上ノ也
八月廿日はかりのよの月のまはせしまのなかめ
秋の気色なとしおもかけてかくおもひし此大臣の月のうら思
まよひ給ひ有
のほりぬる煙ハそれと　源氏ひとり御歌之
まよひ給へ　かの上の服衣に　かくうすすみ
かきりあれハうすゝみころもあさけれと　源氏のとハ妻の服なる故の定なれとさ

ノミ深クモフカストモ常ニ不絶ト所作ノ衆カ多クラウスナフツイテリ
法華三昧ノ　普賢ハ法華ニアラテ元来遊ニ三昧ト云観音菩
此ニ三昧ニ住シタフコトシ　文殊ハ普賢菩薩ト共ニ法一聚会
明普賢ト文殊ト大願薩埵
みこきみの　リ字ハキヒトウタ丸揮ニアリ子ヲミテ陵ヲ吾モ
袖のうへの露　むかし文ニ明ニ歌ヲ又切ナル心ナラモ
しくおもひこそけれ　源氏ハクリテしものヲ含くへし
時もたゝ行末を　リ字秋ヤツ分のかたを
身をしりそけゝる　吹れて身をしりそけゝる秋風をと須海ニハ
以音アリテ巴ノ音ニテモ心ニ通シ気ヲカラシシヤヨヨモナル
（手ガニサムク秋ノ中ヨ風ナリセシ気ナリ）甲ニヤ
菊の花しきえたる　ほけ候しくる所なるへし

二つなりひのきに　既伺ト云々のキシ侍るのことの事
名ある菊にもさかりのこゝろへし
作りとさこそテリトハ　安ノ雪ヨリノ中ノ文ハ折花おもての宿ろもと
此ニアハテ作レモウクらしや　又さまさまのは花とハとい雲林ノ
折花ニ付れてし源ノ名ニサラハ思ヒシモトアヒハ式代ニ秋ハ
源安　みこらくくヤヘたしトモ折フシノ色モ雪ヲ手モ
文段　源安（氏本ト入ハ気ヲウツシ子孫ニトク
こころしわすれよ　菊ニヨワ（タルヒ　気ノ源列ニ
人の世代気とさくへし
とくのえし　陽花キレハてヨ風折（キヒ氏意ニ不言スヽ法リ
こゝろのり狂人御しなりを　世の聞モ
とよう明し　心ヨリヒトハ陳甚ぶ物ノ事ナト成功モ也ノ
わのもしるかり
われせさもやとえこれてりと　帰なおもりんそろれて也之

あまりやとて出し人も今はたゝおもひたえなんとはかりを人つてならて
二条院の御時にうちなりける　相模國に二条院と申すゆるし
うちとよみけん
あくかれいてやらて　六條殿の二条院相模の内にて行し
まさしく出家しつ
御遺愛有らんとて後ろに　後を守りて御文の人は候し
今日まての御ことありける　早世の事ハ二条院に候ける
法性寺殿ハこそおはしけられけるとこそ
三位中将
みかさ山のはやまの行けり　御中将三位名同りけり
御中将ノ源氏ヲこそアラハシタリし　赤橋殿とはかさねて月に
赤橋殿ニこそアラめ
秋のよを
赤橋殿に法住寺有り　御中将の御なし

こゝろひきりて何とも引かけりけりとたゝ何ともなき
名殿やすくとゝめかれて　くさし
忘れかたく　三位中将の同日の　ないかうへかさね
中将の君とこそきこゆれ　御中将ノ子月更衣に
三月に
色さえまことにき　絶え世をかれ　そこそ
春をもかさね　ある人に海
ひかりは　花はぬ院の殿をつけまして　ひかり
ひかりいて　ひさしくもかりのつかさしなりけれ
こよひ今こそ　こよひやりつる　三月に又これを
しは志ハ左ノ兵衛佐ニなりけり
おのゝやこそ　御供ニ紅ノ絹ノ月毎ニ御有り申すかはねの
そこそかりのまのとも行

ひとりものゝやつすかたを　以下なりしものゝ中すれんも
人しれぬ恋を嫉けし　此句も哀し恋句の生活也思え
桔梗さく草のかけ　此句は時節也とみえ
ゆひをとりてや　夕暮ハ大方の旅れ人哀をとりハ須
かるかやや大方への言葉なり
いまもきこえて　くるかけれけし　悲しのすゝすりしまし
ともしけれと
例の人ゝの文やを見るとし此文を用とけれ今月たれ
哀の表つりけゝ文入れハ世房のとりわけとしちとせと
夕なれとその仰とすりしとるとりそり
定のつらまう　色ハ能との内にきし
そてしれハ　月影

大内山の秋の月かな　古歌に見る人ハ大内山の也大将
の在座大内ニアリケレハ見やれとも一言を歌に和すの大
内山トスルカシニ天時桔梗御歌勅使ニテ来リテ
白雲ノ九重ニタツ山モ八トヨミシヲ思テ今源氏ノ物
サヒシクコモリヰハスルトヨミ玉フテ源氏抄ニテモアリモミ
ゝえ　月影をうつろひゆく人の杉かれとそえ
とやかなん
ゑもれとも
ゆかしきことのみいふなり
それ申しつれハこそなかりけれ大方のことを見るあたらしき
かのことはりなしみをしれけれ是や申すとき見へ候
てるや　桔梗又ハ夜霜をそのとのこと見ての様し源氏
しつきに月草をすれハかくこしうをつはしも月影ニテ枝
ウシ　桔梗ニアリテ和歌ニや私ニウシサハウスルト申モアリ
ナミ　月影ナリケル此句何くニテトモ不見之所

うしろめたく思て 六条のくひ御かくおほしめさる
よそにてもなくいとおほしめして 宮よりは六条年し
うしろめたしとおほされぬ人 三位中将 紫上かよのうへい
中納言 葵の上の御兄 食スミ中将ニ也 食ヲ見ニ也ニ中将ニ字 言ヲ字ニ云テ紙ニ
くれて ミヤキリ 言ふにて也
大臣ともの女なるへきもの 宮の御心也

いにしへ
この人御かたの殿 葵の上は桐壺の帝の時の左大臣の女也
析むかし中将ニ時分ならはさき 六条御息所とも
ときかりけりつゝ御とし 時の御母君ことなる一字九日
のとゝせかよのひかるかさねるにも源氏君の御なけきなれ
の人あゆ三人て御けき給り

〇
源氏おもひなりけりのほかにみこ 源氏の詞
花ちるさとへ行て 御さまも住ひかたしの給ひし中将
舊跡をも 源氏の上かれてのしめの三は中将
御こゝろつかひや
源氏さかしきよのたへや 源氏父は御心は御父の桃宮の御
おりけるを今は 左大臣の御女をあら給ひしかは
かの御中よりの御すこし 夕霧のもと也の後也
こゝらみなむかしの 源氏の文なり
かへる今にも御心のあはれには 葵上の御おもひし御心の恨かな
四まへ尤大三有ニトし
露暑気浴霜花重 旧枕旧衾誰与共 長恨歌
しもさゆる夜のせうきんらう落 葵上は源氏十六の御ゆかり

紅ハ只轉ノモ又ケタリシテラウツミルやうもトセ
うき我からき人いきれ　長恨哥ニ唐ノ井ニハ秀スヘ翡翠ノ衾
寒ク誰与共トアリ旧枕古衾トアルト和哥ノ衾ニやうテ下ワクモ
和ニ古文真宝未哉翡翠ノ衾寒ク白氏文集ヲ十二
唐井ノ勘ヲ定メ旧枕故衾誰与共ニトモ叶源氏也
亦念ささミ訳し　ワシヤウ　言ナ年来ハ下ニカヘ之三ヲ少華ヲ思ハ
未ノ人へおもう思人ハ同気深し
未の氣色し　ソモヒトアルヲ　シトスナ又ヘリ花ヲ前ニニアリ
一日の気すへし　よの詞ヲ枝タク下草の中ヘしてても人
中ニにたし世の花也トモヘリ哥ハ床ヲ夏ヲ床ニ用ルへし
長恨哥の別の心わり
白いしほらんせきを治ひく　又定ノ左前の長色々也

よくおもひの花をそへやうし　左大臣の詞のやうしおもひとも
まさへしとより後ヘりしすとの後へしと後へてのさとや
又源氏のまさかる人とミ下れとも人てしの後床と思ふや
うきふれしとミ
中言の後とし　夜つゝ下言の後かくへアり
おもひつき君　目出たくし　りの人ら花の初音
夜のまま世ハおかくとし　源氏也言し
ふふまれしとく　山詞出ニ言しみる人へわするとさへとこともり
ひとんの人の後それ　色文の絶ハ夜数冬ニ年絹色ハ木ノ袍ノ
コトシ同ニ無文ノ冠其ハ様々何一品ノ帯ノ冠ハ有文ノ羅也
服者ハ無文ノ羅ヲ用ル冠ニ無文ナラ錫服者ノサ
タニシハ定タチ也

日まだくらく行ちかふ雲の[illegible]　源氏の[illegible]九郎の三河にいたりて
天慶十一年ことありし人を思ひやりし[illegible]
いまだくらし　末の行や　和歌並ぶ
[illegible]まもなくて　[illegible]と云ひしや
[illegible]こそやとひく　[illegible]の関東まで[illegible]
やすきみちに行や
中将君ときこしれる時しるまひり　[illegible]の東国へ出
行とてきたる都へや
其身は旅人に　源氏の行末[illegible]かり
こそこの月にやをしけるか　[illegible]ありて[illegible]や
わたりのそれに　新地の三ヶ所[illegible]の跡
冬の日の月しき色　[illegible]の中に[illegible]の国にて

日を見て　をしは東方ニアラズ[illegible]しき日と
の国にしれけるに
謂のこころに　[illegible]の[illegible]を出してあれ[illegible]
源[illegible]は何につけて申すに
三つの月におきて　三ヒ三ニテモト[illegible]トヨリ[illegible]三ヶ国
年へも　[illegible]
ひまの前にして　お伽ニ申ス女也
かりのもとに　今ハ女文字　アラズトイフニ又サルトイフ
[illegible]に付き[illegible]ありし[illegible]　そことシテスナトヨリ也
あこかれはいまにきこえ　[illegible]也
恋しき所の　わく月つつしみて
[illegible]へさへしと　月の世の名の[illegible]と

ぬ居ハそくしけれ　朧月夜ハ東宮へ参らせ給ふへき一説ニ大后ノ女ノ十九歳也

まはゆくしと思ひきこえて給て　此居の詞

をやうしまそその給ふ　源氏の心

あれハまうさね　川云

年もくれけれ　源氏廿二歳ニナリ給

あさはかなるとかこと

まやうおうらとも　川云ナメテ心ニ其心云あ高處サモ宮の御の

の御の詞よく思ふ給ふそて書てもこの心アリとれ　玉の

さか木

巻居ハ同及云為巻居ヘ此巻ニハ源氏廿二
歳の九月より廿三才の夏ニ至ノコトアリ

斎宮の御くたり近うなりゆく　斎宮群行九月十六日ナリ行

御息所もものうきを　野宮のあはれ

をしはかりて下給ふ例もことになけれと　此斎宮御くたりとて下給ふ其

此ノ斎宮ハ六条ノ御息所ノ外ハ無シ御トモ斎宮ニ母御息所ノ添下ル時

村上ノ御時規子内親王ニテ下リ給フ時母ノ徽子女王重明親王ノ女

御ノ事トテ下リ給フアリ此時ハシメタル事ナルヲ例ナ

シトさる

人ハ四つき給ひしと由　源氏より我ハ今スコシトハ思ふ心也

りとの夜より　六条京極更ノ所ノ宮ヘハ御所ノ如クモアル也

たちへ給ひつき給ふすとて　野宮より

院の御事のをと　実ニ来ニ崩シ給フ中宮ノ仲テシキノ事リト見エ

九月十六日にりけれて　十六日群行ときは晴気又スクスヘし

そやらハ秋のかつらひのゝ　月影我なと思ふにワアルへ
きら文字ありけと
よの末もしらしく　新文ノ安流野まん人との子ニ成杉
此所ヨリ絶テ後浪ニ引ニテノ年七八四通ヲつと
小宰ら大名くらし　近衛ニ大宰文ノ福ハ宰相ラフトラ
新文所　文も己と唯ろつ見る
ゆくしき
ひとらや　継ニミとも
シタヘル処ニ　大姫ノ小子ニ人アリ近衛ニ見るクウ継ト任
文東宮ト云アリ両用ヲ不畫
やうのけりきて　源氏詞
かの秋いさんことし　新文の曲にら
クワぬ子ん子ろ人しん　継ノ色ニヨクアノ読

井かさなて　大宮人のこまくかけてのゑかりけへし
継くさいは　此巻諸ありけんことく大臣の御代をこふしれ杉ニも
見つきこらしるさみてもてかはハ三位の山家の家ニて
紀らん者の家の心んとかく思ハ身もらそれ思えたへや
そこのみかり
そとかこら　継　菊の世をすくハしとやそれが家をたてて住り
今は家をひろハしおかし　せ家を両のすえ
ことわりて　あけてまりくのしまも
月は入かりかや　上旬夕月夜と仰けしけり
めつきの所ハ　源氏の家
何は へてりとこし　業人のこしてとめるへ各別
長奉送使　業と勅使とハ河原まで借ま文を近送

ハ作者なれは所によりて　見るへきなり
貴人のつき世おほかりし　中宮の御かたへ心よせてまいりし
けはひなきさまにこそ　秋好中宮になり給ひしも
すり神わさにつきて　冷泉院をもとめしの宮の御こゝろの所
さり方しまいらり
くらゐには外　雑ト之　山階トカテハやうツミ外ト見之
十三ハ斎宮の　秋好中宮の方なり
前斎宮　秋好中宮也　今の母も斎宮御息所なり
ノ房トヨテアル
里にくるにあるはなり　二条院にて大臣の所ハ見し
出逢せさる所を　秋好の中宮のむかへるによりて
めやしれたまひしなり　源氏の御むかへにて之

こいろすゝやうしけりうてうし　冊三源氏ノ歳年行に
中宮これはこゝろは　秋王ノイトヽナリシテ又時ハ御乳母
ノ斎宮奉リテ九興ニノル　今秋宮八十四三歳二十九母院
斎宮と宮八同輿ニテ内へ参り給し　幼主ノ行幸ノ時ノ
例ナ見るとウシ
ちなとこ其　中宮ノ文大臣ノ年ナリ
冊三ノ　中宮所ノ事也
そのことを少ないけれと　中宮の御弟源氏の宿へ
中宮のまつり行し年ハ十六歳にて入り給ふ年源氏ハ
八歳也　中宮十六ノ年源氏十三歳也　前坊ハ朱雀
院の三坊ヨリサキノ東宮ニテハセシナリ　保明太子
小一條院ナトノ例也　見る

かれあしそれまよひけれ　天皇大極殿高御座ノ東ノ床ゆかにおりて
庭ニテ昔ニ入タル橋ヲイトヲモ作テ前王ノ額ニサシテ京
ノ市ニテヲモ合キ給ナト伝コトアリ花ヲ見ルニ付テ御額ニサシ
八重とそつけゝる　太政大臣ハ八重ゑんとて只八重ばかり
その八重の花は何の故ソ　去年ハ八重の東の方ニて
はしらし
くらゐそ高く　花ノ時ハ内ニまゐりて御遊しけり
よし花の大臣を　西洞院よりもとしてはこれより北
前太政大臣　一説サハリ也し二代内大臣文書アリ也
此御前太臣ハ式部大臣の世の流にてしとけりの宮
於ゝりしをそこハ何りせよとて此院ニハ同村上の母ノ
文をもしけりて選子内親王に前太政大臣稲荷
皇后ノ御ニ成テ

長うたけ武きもしやんさへしてれ　御垣の内の花
すくのもしきけ武は思ひさへしへてらし
さはりしを思ひて　かやう朝霧ノ東風吹せめしへかし
よし高のとけを　此御所に申して三
ふりつくりりれりと　東宮にもかやうにおもひ
こ小今上所ニ其院ニ　春宮のよし
太后に　弘御所　皇太后宮に
中宮のく　入道院は中宮文書あれハ御
かゝ世の内にしける　後に成りて世の代政し給ふ院に
天皇御即位の御母にて未だし給し
おりさへとし　太政大臣大臣と太后大臣御即位の後
おりてかく物ゝとし

みたれくのゆくゑしらすなりけり　定家ノ人ニ哥ホノすと
志りとなんかきのけり　夕ニ十文カノ事也
京ハ三条なんとやと　花盛ノ若紫ノ又花盛ノ春
ひのもとのしおや　浮し行衛へくよりおる
狩て乞食しらとふ卯勝
あまりかはく言うれ　浮しやるの哥高祝の里のなきあれハ
あまりとをおしろすとこ御書をこし　けるりてと気あり
しやるは御て言ヲ書の里面気けるや
その頃て　沢有書き
言ちき家ハ　三条家す
年久りつきて　源氏卅三歳ニナリ給フ
浮川なんりけり　三条浮ノすし

北の方御なんかくろ　三ナリノ一也
浮なん中思をやうれ居しおりける人ら　浮舟思人ニ手習ナキも
居ハさしとうらし　北大臣ニ梅壺ヲサセントシ給ヒ
物ヲ気て人の　時ノ帝ノ御気おそ居ナル御叙ヲ言フト也
思の行ありしりせは　源氏窓迎くり
こにも見ばらつきしれく　紫上常居りつり御気色を忍ぶと
源氏も浮をも浮しうきし
との中年よ　右ト左トノ手ニノ手ノけりきすし
きりおき北取の仍せり　源氏を浮の従に行の
ひくひく　高くなり
御かりかり　大中タニ入リ文仍若紫ヲ高殿ヲ思ひ別
新浮ロ中ちくあれ　葵上ニ居脇ノ母三条ノ方ニ卜有り

読たる也
一勘　権中納言敦忠ハ延喜帝ノ御子也乙戸雅ナ
ヤラ古ノ能三日ノイトニナシハ宛モナク月数ヲ過(シ)ス也
孫王乃兵衛　左記　以白王女ノ弁佐(サ)ニヤ
中将ニテハ也　権言ノ女房也
ワヨキ而モトクサトノ心ヲとろひたるとひとりけくハ立ニ叶ヒ
中納言兼　時月夜のことの女原
朝夕ニヨタテ一ツ二ハ(ヘ)タニ　源ノ人ニミラ今日マトニモ
只ニこにもとの同中作ちる　四ら卜弁ヤ時アノニハアカルニヤ　一勘
今案寛直中ノ近衛ハ其八夜大将次将ノ右中ト井サシタ
ル上首ノ(ヘ)ラ異サニテアル也今ノ物語ニテハ近衛ツカサノ中台
(タル)ハ雅ニハアルラシ也ラトノ井中ノ近衛カノ(ヘ)ニラシ(ヘ)シテ
此ワ名リミテマハツクルラ大将ハワハニテナス程也此説ニナニワ

ツラハシキトハ右乱シトラ之ト中ハ右近ノイトノ井中也此時源
氏モ右将也　又云次将吉(サ)マトナルニ近衛ツカサノ乞て衣わ
氣候(ヘ)ノ源氏ノ君のこひハ紅とえへんとて云(テ)边(ヘ)ラ
シ(ヘ)ラ玄ニスルニヤト源氏ノ仕ナラヒ候也　一勘　源氏ノ仲ノ身ニハ
えるすみれとすクルヲシ思ネテモ
毛詩　白圭之玷尚可磨也斯言之玷不可為
胸のほのとへて傍よろかめてのさまり
なきの涙をゑ　白今　朱雀女院ノ御かうての御母なり
兵衛督　いけろの身也
以が将
りてくすれてもとを人の　放遠より
ぬけえしけきとしそ泣ちを　源氏のの花らくひしてられ給有也
高の大夫　中宮の大夫也

御いてとらしうらも宿世　弘徽殿詞
まうし給りんきころけ給はりけり　帝をとらえ給ふ時
弘徽殿の御ましなんまいらせまいらせさせ給ひけり
帝御ゆき侍なれりしく　天子ノトキりとも
よの中に候りところにくきれんし　源氏詞
はかなきの　源氏のとやそう也給ふとの給ひ詞とそれは
わかりしまこともと　そのまのころのつけりくまてら君こ
そ我にはかなしみけりされ　私
かくさ世の事三代　今さら弘徽殿の思し源氏ノ紙に給ふも
世に忘れて　思ひ侍て源氏ミ思ヒテシルハコトヲ給ひて
ミヨシノ先帝ノ道ヲモナラシテランコトニ思ヒテノ給ふ也
この世にも　ことさ

太后のあわれまうしの給ふ　弘徽殿中宮に成給ひまいらう
弘徽殿の給ひをはしまし
戚夫人のやうのやうしん　史記文之所やす夫人のやうまゝ
ラミシホトハナクテモ人のはかなしけれ事ニアルコトシ
まいらもしうらくし　書文より
れ給ひせんとしうらん　弘徽殿詞
或給ひやうしや　ゆくとはむかしの母の給ひとされはやうし
母后の事り給ひ人のと言ひ人の給ひし　東宮の母とものてん
女んこうんまつらまかりしう
ふれまつらやとも
雲林院　淳和親王　是河うまん人ともゆら
まさ人のりけれ　川号天ノ后ノ后

ゆきをわれとむすびしやと　世にのこるやの心
きこゆなり　清文とよみし
そのくまくを　梶原にて　白キアゲハ中きし
わかれの庭　源氏のかみはこゝに心乱しなれより
風かけきたるそうして　はるかに見してわかきたるの
新と世の中のかゝらし給てなこにかへりなかる　見聞こゝに
中ねぎて
いけるくは　横笛なり女房なり
秋にかゝるこゝろの道にて昔かゆかの
心横ちれまする道とやしけれは秋こそはかなし今
八新侍もんのひのきゆくて
せしとつきし　川ぎりくこへ続くる一年
とりくはまんのやうし　川ぎりくさとめし心の新侍し

三位はるうらしとなのとくおしまえ
里人の　新侍よりはゆるとつけ行き
そのこや　源氏の言の行とおかけれどくかり昔秋の
ゆかとととから行て
ちらき世しとうそ行り
きてけさるかし　かのみのうやうくとり
秋ぞくや　川ぎりまき
かねしえとのの　折りの様し
かうりの秋うらしとそくかりまれの秋からふきらる與
侍しくのそうかぬ　秋文新侍はれは同やくし心下
命とりの心を　新侍の心
さきかうひく　宗よし
宗すとかく道をくおうして文飯古人トモ

なるとき中将　将軍之御史大夫に書状を立て家を守る事
其の中に召される人々　唐代に成て源氏時に是は又御見え
皆ひとへに此の　源氏の古くに見えて
三やしまてせり　花薫中文にて
花行けるを　文相に中文人書文になりしをまし
白毅と名のつきやうにて　白毅と名つけて此人は公のおほせ
行きくるう　川より御の心その後に行て
謂ふ旦とりそうして後人のゆくりめし
源氏の事是の後に伝りめぐりは不意旦とりいすきにゆかり
〻用し
三つの時より文捨たりけり　吉文の御事をは中略にて定まり
申しけるし

まれ行ときは生まれて　中文の三条家へ四位日源
武家の方より
中文の二つひとつ三つ名くへ　堂上の舞をまれ行して三へ
物よれ也りかしめて
東文をは行ての中文に　朱雀院朱雀の中子に生也
（下に後述言わりしとも
大家の中宮と　儀の先子也
迷いけん故　朱雀の母后に生まれ
白虹日を貫つかれけり　深書文　之河東らやタフテも以有ト也
太子行かくる　ツウル也
月を見やてなりし　上行に七つの月を見てくとめりしぬの文
かくしけり

九年し音や入月と　中丈の流音　此音と書文源氏守とく
待く旦人の如しくて得ぬるも定家の詞し源氏の露も
人の心の詞に音に露し人とならぬや
月新ハ　さ上音西ハ中丈の流音をうけて月の本とこ夜た
マトトモ源氏の旦をともろく入れ詞としてより
子きまし人のと　月音山様ををりし人音
兼家とも心とて　賤月夜ハ手紅勝とて人ぞれてなるへし
きとて法をそも　源氏文詞　さまて法をそれとひするとやうし
何事なや　私云ハ恭トウ母トの事又ヒケクロ弟以中ねノ
ダテノミトトミノ本ニ見タテ人ニツリシテノトモミヤ
リノモモノ与キ孫ニ　月音秋ちぬ待し
何の外人のらえ　人音の心ハ元ニカヨヘツヤ面ハ涙モ共ニコボル(シクル)ハ

花音但馬何不の文さん初音ハ我心し元モ同ツヤトアルツハ我
何モソナタノ心モ皆ハニイヤナ西ノ元モモワスレセヒトヒ　聞エミステ
ノ音　ヒヤミルやハミル心や　何かる所の月音面ハ涙
ともし三スヘとも何の涙ハ月心ミユルし今何丹ハ我涙トモミ
任せしまれとしてひるもしと心すへし　我ガミニ見えやハ人心に
沙ハ篠のハ雨とき　中音のすとする人待をいまし
高と三日て行　中音へて
別けし　此まではうつに音しも入へきり
まりぞり見ろうしらいはり路を　かくろ翅百のす
常のやうしんくくうて　さ代行と
十二月十よ日　中音の流ハかるも
定めかれすも　一動不定事に　定めかれ法事とも　中丈ハ篠ハ毎年ミニ歳

ちとせふるまで　竹ト篁ハニアミテ縫フウヘルもし

冬帝の御ねがひ　中宮ノ文ノ御事　読人同じ

帝ノ上ニ申スコトノヤウナリト

五十日の日　五十日ノ日トヨム也　一期

ミこのよのおもしろきにて　中宮の御気の気色よきを見る給也

さとりたる横川の僧都　中宮の御とりもち

いまそこしらん四郎　以ろえし文の白河院の勝地にこそ有り

中宮ナラテ元気ナリトく

花宴のかすりも　中宮の花宴と焼給しけるをきゝての

とのへし

思ひつるもえへしとて　中宮の御心とも気とし

言月のすむ　是ハ源氏の御事とりそふとや

月のすむ　源氏　言井さけれ桂のありん也と申

言の参議三位て切利天の色も世のやさも凍死

大さのうきにつけてハ　后の薨去下向とも云言之

くその八をる出家しやとまうくるし

河よこりて君　川言不見之言ノ心申すとし

源氏ハ我のうし　二条院と

りその御僧し　中宮事し

くりしらひて冬し　能人筆し

年よこりの重て　源氏廿四才ニナル也

内わりそまやし　古院ノ旅固ノ又事文也

内裏

むそしかりし事ハナシテ　源氏のけさうしのる

ことのくらゐたてし　三條実房
はなむかへりけん　白馬中実つけまし
むかしのおもひとて　大臣ハ二条ノとものまし　三条実
ちりもひとつとけなし　例の子細あり　一院大敵とし　一らた
大将と　川岸杖操てんとく
はりしらの　こ源氏ニ於テハ源氏の孫浦済セちり
てもちり子孫の心やさかしきまし
はきそし　春の隆昌なれ
孫たちの道深くして　実の源氏にてこそ
天子にとりて加階ス　其年其ちゝ実が名だかりけれハ三
実の年齢ぐらい陀羅もなし
世と定まりて雲ゐのこゝろつきもの也

其封ノ上ニ五段也入候ニ付ヘ上九十五　一勤
我思ふこそ折りくる月を　中実の浮世
我ニ真ノ罷ク　お家ありし
う御為に　源氏の家の人とて
清源氏共に　大臣の子なし
折の表にあり　後例先にあり七十ヶ年迄
今ハ一家のもの　二条大臣一執し
浮世もいるまで　左大臣殿は
このこの思ひつきたまひけれ　三位中将は
春秋の浮雲　同源氏ノ子孫にて定まれ清華
こそこしハ源氏ノ子孫ニ候　一勤林十年ナトニハ定リテ
又この今　已下

ほゆくも左ちけしさり　三位中将宗大
中将の御子のうちしうしそそ　江将太大臣し
三ある所とてうしく　備る未律
ほいまし御代こゆり高のと　うらやうの葉の紅色
それもかとけるとひてけるか　蕃薇ラミテヨマリテ六首
大朝ひてもうとよまりハ古今ろ御名集して持ちしのらて秘ハ
けるうひうれミワルトヨメルヤうもテ子ヨメル二やうら源氏
の事も用と見える二高所の事をうけくりとらと
御ととうらうくしくきこしとしかとば　三位中将
是源氏二酒ノ人念ひこシ井テイラヘル御と
かくそりしとうけり　純るる同し
法りゆうろいさら　御書しけり年るやうしるるとととと　一動同

たりそ　ててやと　タハル、荒る
文王のこ　史記文見河海源氏ノ身ヲ周公旦ニ比メ給
詞也サラコリいとや
成王のおかくら　註者詞也　宸ニテハ冷泉院ヲ成王ニ比ダリ
花し成王ハ武王ノ御子し　此物語ニハ冷泉ハ朱雀ノ弟其
次ギオノタカ入リテ
帥宮も　兵部卿宮と
トノもしタチ　二条太政大臣
三つ宮のかうらもし給しけると　弘徽殿侍言と
中将宮のなけれと　中将ハ二条太政大臣息也
たくかミラふりうき之殿し　弘后方へし
新院とも秋きぬへとてして　権言し

うつくしの御かたち　朱雀院東宮にたまひし時の事也
きよらの御ことこそ院の御心をおもひ
源氏に入道の宮の事をおほしめし
世の人はおもひなけき給へる　御後見とおほしめしし思也
御子は春宮にたちたまひしかとも御末ならす
又の宮の御かたの御事
こなたは御心の入てしほしほと涙とともにおほす
世の中の事のおそろしかりし
御封　同事　封戸ノ戸ハ人ナリ五十戸ハイカホトノキサキツヤ　一郡戸ハ八郡アリ
五十戸ナレハ八百戸アラハ以上十戸封戸ナリ

花散里　　天暦三年より年ノス寛弘源氏廿五歳
夏五月ノ事也賢木巻ノ末モ同夏ノ事也され共
六月ワタリ三ヲノ事アル也夕顔巻ノ此トミエ
かけらりしくわさ　白虹日貫つらぬけりと云ふ事有て大臣
生ひ見屋　相葉帝女御と花散里ノ事ラハ以メキて
ことしかるへし　家これにより源氏のこと思ふ
人心へし　此女御の方ひとつにかの方の
ここにとりにひし　此のうちひかるへし
ここにとりにひし
郭公とかたらふ声　源氏のとかくしおほしわかる
とまるかかり
えしらるかしこおほえ
りいてくしきをのいさこそ　川をきかは此の庭の楠に啼

つゝきうり

頭ろしも見えしも　雄之うち枕に共寄らせ女の頭より

いれて　山川らくうまり

其の月流れうつれる本ゝとき

五月は夜くら夜の流ゟ枕うはやうつし

二ろ夜しまをゝろし其まをすみをとは　丸ことはかりて

夕ろ流ときうへ夕しましおもそし

まつても　を

とゝ流ろう世すれを

ふはせをあんいてことも　九尾の雪へうむやゝくん河流

くと北せろくりの行末うや

右表紙ノうらニ
墨付八十九枚